

京都府埋蔵文化財情報

第124号

平成25年度京都府内の埋蔵文化財調査-----	中川和哉-----	1
共同研究 美濃山地域出土の古代銅製品に関する研究 ー瑞雲双鸞八花鏡を中心としてー 村田和弘・引原茂治・関広尚世・大澤正己・鈴木瑞穂-----		7
京都府南山城地域における古墳出現期の一様相-----	小池 寛-----	25
平成25年度発掘調査略報-----		33
13. 向山遺跡第2次		
14. 平等院旧境内遺跡 史跡・名勝平等院庭園		
15. 松井横穴群第3次(1・2・4・11トレンチ)		
資料紹介 山崎津跡第18次調査出土仮名文字資料-----	松尾史子-----	37
長岡京跡調査だより・120-----		39
普及啓発事業-----		41
センター組織と動向-----		43

2014年9月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



女谷・荒坂横穴D支群4号横穴出土瑞雲双鸞八花鏡 上：鏡背（処理後）・下：鏡面（処理前）（原寸大）

平成 25 年度京都府内の埋蔵文化財調査

中川和哉

平成25年度は当調査研究センターによって新名神高速道路関係遺跡の発掘調査が京田辺地区と城陽地区に分かれて本格的に実施されている。また北部に目を転ずると福知山市で河川関連の調査が通年行われた。以下にこうした大規模現場をはじめとする当調査研究センターの調査成果を中心に、府内各地の調査成果を北部から地域順に概観する。なお、丹後地域は京丹後市・与謝野町、中丹地域が舞鶴市・綾部市、南丹地域が亀岡市、乙訓地域が向日市・長岡京市・大山崎町、南山城地域が宇治市・城陽市・八幡市・京田辺市・木津川市・精華町の遺跡について述べる。文末には調査組織を記した。

〈丹後地域〉

与謝野町^{いしだに}石田谷遺跡は天橋立で限られた阿蘇海を望む緩斜面上に立地する遺跡で、与謝野町教育委員会の試掘調査によって発見され、平安時代から中世の散布地として登録されていた。平成24年度の小規模な調査に引き続き面的調査を実施し、奈良時代と考えられる布掘りの柱列を持つ掘立柱建物1棟を含む2棟の掘立柱建物と弥生時代末の竪穴建物1基を検出した。竪穴建物からは弥生土器とともに鉄製ヤリガンナ1点が出土した。また、調査区内から検出した谷状地形内からは弥生時代後期から古墳時代中期を中心とする土器群が数多く出土した。中には弥生時代末の墳墓に供献される装飾付器台や内面に赤色顔料が塗布された片口の鉢、赤色顔料の付着した磨り石などが出土しており、谷の近くで祭祀行為が行われていた兆候が見られた(当センター)。



写真1 石田谷遺跡竪穴建物

〈中丹地域〉

舞鶴市^{おおかわ}大川遺跡は、由良川河口から約8kmの左岸の自然堤防上に立地する縄文時代から近世に至る集落遺跡であるが、平成25年度の第4次調査では平安時代後期から鎌倉時代の掘立柱建物5棟、土坑、室町時代の石塔などの基礎と考えられる石組み遺構1基や井戸などを検出した。井戸跡の1つには丸木舟を井戸枠として転用したものがあつた。出土遺物には在地の土師器、須恵器のほかに



写真2 大川遺跡全景(空中写真)

東播磨産の須恵器、九州で作られた滑石製石鍋、中国製の青磁・白磁のほか、朝鮮半島製の象嵌青磁が出土している。遺物から中世における大川遺跡の集落は日本海にそぐ由良川の水運を利用して他地域との交流が盛んであったことがうかがわせている(当センター)。

綾部市^{あおのみなみ}青野南遺跡第9次調査では提瓶を副葬した古墳時代の土壙墓1基と奈良・平安時代の掘立柱建物5棟、中世初頭の掘立柱建物1棟などを検出した。出土遺物には鍛冶関連遺物である鉄滓やフイゴの羽口がある(綾部市教育委員会)。

〈南丹地域〉

亀岡市^{いずも}出雲遺跡第16次調査の調査地は、亀岡盆地最大の全長約80mの前方後円墳である千歳車塚古墳の東約450m、丹波国一ノ宮である出雲神社の西100mの山地に取りつく緩斜面上に位置している。扇状地性の堆積物を基盤として弥生時代後期の土坑、古墳時代中期の竪穴建物1基、平安時代の2間×2間の総柱掘立柱建物1棟、中世の中国製陶磁器や瓦器、土師器を多量に含む大規模な溝1条を検出した。中世の溝については出土遺物量や直線状の形状を呈すること、そして、その規模から出雲神社を中核とする集落や施設を区画する溝であった可能性が指摘できる(当センター)。

亀岡市^{なかくふんぐん}中古墳群第2次調査では、5世紀後半から6世紀初頭にかけて築造された方墳からなる古墳群で、今回の調査地は、中型で葺石を持つ方墳である1号墳に隣接する地域であったため、古墳の検出が予測された。調査の結果、近世以後の耕作地開発によって大きく土地が改変されており古墳は発見できなかったが、勾玉が検出されており、古墳が存在していたことをうかがわせた。重複して存在する出雲遺跡との関連では中世段階の不定形の土坑や柱穴が検出できたが建物としてまとまらなかった。また、同事業である^{みっかいち}三日市遺跡の調査では、顕著な遺構、遺物は検出できなかったが、調査地に3万年前以前の湖があったことが堆積観察で明らかになった。湖沼堆積物などの間に始良Tn火山灰や大山ホーキ火山灰(上のホーキ)を検出するとともに最終氷期最寒冷期以前のピート層(泥炭層)を発見することができた。周辺の調査で旧石器が発見されていることから今後の調査で良好な遺跡が発見できる可能性が指摘できる(当センター)。

亀岡市^{あまるべ}余部遺跡は、桂川右岸の段丘面上に立地する縄文時代から中世までの集落遺跡である。



写真3 出雲遺跡全景(空中写真)

平成25年度調査(第13次調査)では竪穴建物2棟と鍛冶関連遺物を含む中世の土坑などを検出した。竪穴建物のうち1棟は部分的調査で時期は不明であるが、1棟は弥生時代後期の方形の竪穴建物である。出土遺物には遺構の時期を示す遺物以外に形象埴輪片や耳環などが存在することから、周辺に削平された古墳があることが想定できる(亀岡市教育委員会)。

亀岡市^{しのようぎょうせいざん}篠窯業生産遺跡群の窯跡から近江産緑釉

陶器と類似する濃緑色の釉薬を厚く塗布し、素地が明るい赤褐色の緑釉陶器が出土した。このため従来、平安京内で近江産緑釉とされていたものの中に篠産のものが含まれている可能性があることがわかった(大阪大学考古学研究室)。

〈京都市域〉

^{へいあんきょう}平安京跡右京四条一坊七町において、梁間3間×桁行3間以上の南側に庇を持つ東西棟と考えられる平安時代前期の掘立柱建物が検出された。発掘調査地は嵯峨天皇によって造営されたとされている朱雀院の敷地内にあたり、院内の構造の一端を知るための貴重な発見となった(京都平安文化財団)。

^{へいあんきょう}平安京跡右京北辺三坊六町では、奈良時代の竪穴建物3棟、掘立柱建物3棟、平安時代の掘立柱建物2棟、柵列1条、鎌倉時代の耕作に伴うと考えられる並行する溝6条、室町時代の掘立柱建物1棟と石組み井戸1基が検出された(京都市埋蔵文化財研究所)。

^{へいあんきょう}平安京跡左京北辺三坊六町では、平安時代初頭に掘削された真北に対して斜め方向の溝を検出した。平安時代の造営に伴う運河の可能性が示されている。また、調査区内からは豊臣政権の五奉行の一人である前田玄以の家紋が施された金箔瓦も出土している(古代文化調査会)。

^{からすまおいけ}烏丸御池遺跡では、弥生時代前期の土坑から弥生土器やイノシシの焼骨が出土した(京都市埋蔵文化財研究所)。

^{ほうこうじだいぶつでん}方広寺大仏殿跡の調査では、大仏殿の一辺4mの巨大な礎石据付穴が4基が見つかり、内部にはこぶし大の根固め石が多量に充填されていた(京都市埋蔵文化財研究所)。

^{ふしみじょう}伏見城跡では、城下の鍋島勝茂屋敷推定地の調査が実施された。5棟分の建物跡と火災による瓦・炭を片付けた大型の土坑などが検出された。出土遺物には金箔瓦・滴水瓦や黄瀬戸・織部焼・志野焼・唐津焼などの当時の高級陶器も出土している((株)イビソク)。

発掘調査ではないが、伏見城跡の中心部が平成24年度に引き続き明治天皇の陵墓地として管理されている場所の立ち入り許可を得て測量調査が実施された(京都府教育委員会)。

^{てらまちきゅういき}京都市寺町旧域の調査では、平安時代後期から鎌倉時代前期に作られた幅4mの道路跡が検出された。平安京外の道路で東西を通る綾小路の延長と考えられる((株)イビソク)。

^{かみぎょう}上京遺跡・^{むらまちどの}室町殿跡(花の御所)では室町時代の南北方向の並行する溝2条と元和6(1620)年の火災の廃材などを処分したと考えられる炭や焼土を含む土坑が多数検出された。出土した土器には茶陶類が多く含まれ、江戸時代初めの絵図では「長谷川半兵衛」と書かれた武家屋敷があったとされている(京都市埋蔵文化財研究所)。

^{おどい}御土居跡は天正19(1591)年に豊臣秀吉によって作られた土塁で、外側には堀が設けられている。平成25年度には2地点で調査が実施された。1か所は北野天満宮境内に残された史跡指定地内の調査で、安土桃山時代から江戸時代初期に作られた花崗岩製の切り石暗渠と元禄14(1701)年に土塁を開削して作られた道路跡が確認された。もう1か所は平安京左京八条四坊八町の位置にあたり、平安時代の遺構は河川の削平によって残されていなかったが、江戸時代初期の東本願寺飛び

地境内「渉成園」造営(1653年)に伴い付け替えられた御土居の基底部を検出することができた(ともに京都市埋蔵文化財研究所)。

京都市^{ながおききょう}長岡京跡左京三条四坊六町跡では、長岡京期の掘立柱建物跡4棟と柱列2条、溝3条を検出した。掘立柱建物の中には東西5間×南北2間の身舎に南面・北面に庇がつくもの、南面に庇がつくものそれぞれ1棟が南北方向に並列した状態で検出された。遺構の配置から1町の1/4以上の宅地であったことがわかった(京都市埋蔵文化財研究所)。

〈乙訓地域〉

向日市^{ながおききょう}長岡京跡左京第563次の調査地は朱雀大路、三条大路に面した区画にあたり、長岡京造営に伴う整地土と壇上基壇の一部と考えられる地覆石痕跡等を検出した。また、調査地内ではこれまで様相のわからなかった中世の上植野城の堀、虎口、土塁が検出された(向日市埋蔵文化財センター)。

向日市^{いつかはら}五塚原古墳・^{ながおききょう}長岡京跡右京第1062次調査では全長91mの古墳時代前期の前方後円墳の範囲確認調査として東側くびれ部付近を調査した。くびれ部の正確な位置がわかり、その幅が約15mであることが確定した。墳丘の外周施設として前方部から後円部に続く隆起斜道を確認することができた(向日市埋蔵文化財センター・立命館大学文学部考古遺産専攻)。

長岡京市^{ながおききょう}長岡京跡左京第557次・^{くもみや}雲宮遺跡では、六条大路北側溝、東一坊大路西側溝、両大路の路面及び交差点部を検出した。調査の結果、東一坊大路側溝が六条大路を横切ることがわかった。また、二面を大路に囲まれた十三町の宅地内の溝からは漆紗冠4点が出土している(長岡京市埋蔵文化財センター)。

長岡京市^{ながおききょう}長岡京跡右京第1067次・^{かいでん}開田古墳群・^{かいでん}開田遺跡では、一辺7.5mの小型の方墳を検出した。埋葬施設は削平されて残されていなかったが、周溝から縄蓆文が施された須恵器甕や布留式土器の甕、鉄釘が出土している。また、周溝内で検出した土坑には底部が削りによって平底に加工された土師器の鉢や壺が埋納されていた(当センター)。

長岡京市^{ながおききょう}長岡京跡右京第1068次・^{いのうちくるまづか}井ノ内車塚古墳第6次調査は、平成23年度から実施されてきた墳丘の形態と規模の確認調査の一環として実施された。井ノ内車塚古墳は全長46mの前方後円墳で、調査によって西側くびれ部の墳丘裾部を確認し、馬形埴輪や人物埴輪を含む大量の埴輪が西側にも備えられていたことがわかった。また、くびれ部からやや後円部に寄った部分に墓道状の盛土を検出することができた(長岡京市埋蔵文化財センター)。

長岡京市^{ながおききょう}長岡京跡右京八条二坊二町・^{いげのやま}恵解山古墳・^{みなみくりがづか}南栗ヶ塚遺跡の調査は、乙訓地域最大の全長120mの前方後円墳である恵解山古墳の保存整備工事に伴うもので、葺石の基底部や埴輪列を確認した(長岡京市教育委員会)。

長岡京市^{ながおききょう}長岡京跡右京第1073次・^{いがじ}伊賀寺遺跡では縄文時代中期末の竪穴建物2棟、土坑2基などを検出した。竪穴建物のうち1棟からは中央部に石囲炉が据えられていた。そのほかに飛鳥時代の竪穴建物7棟、掘立柱建物2棟が検出された。南東500mにある飛鳥時代創建の鞆岡廃寺

との関係が注目される(長岡京市埋蔵文化財センター)。

長岡京市長岡京跡右京第1078次・伊賀寺遺跡では、石囲炉をもつ竪穴建物など10棟以上の建物跡が検出された伊賀寺縄文時代集落の範囲確認調査として実施された。縄文時代後期の土坑、中期の竪穴建物の可能性のある浅い落ち込みのほか飛鳥時代～奈良時代の掘立柱建物2棟も発見された(長岡京市埋蔵文化財センター)。

大山崎町史跡大山崎瓦窯 (IK16) では、これまでの調査で平安京に供給するための瓦窯8基が発見されているが、平成25年度調査では1号窯の西側に並列した9・10号窯を新たに検出した。出土瓦から9世紀初頭に造営された平安京の豊楽院に瓦を供給していたことがわかった(大山崎町教育委員会)。

〈南山城地域〉

宇治市浄妙寺跡は藤原道長が寛弘2(1005)年に建立した藤原氏の菩提を弔うための寺で、これまでの調査において法華三昧堂と多宝塔と考えられる遺構などが発見されている。平成25年度の発掘調査では寺域の西限を示す区画溝と西門が検出され、寺の規模を復元することが可能となった(宇治市歴史街づくり推進課)。

城陽市水主神社東遺跡第4次調査(D地区)・下水主遺跡第3次調査(A北地区)では、交差点改良工事に伴う一連の調査で2か所の調査区に分かれ発掘調査を実施した。調査の結果、東西方向の島畑4か所、南北方向の島畑8か所を検出した。島畑は13世紀前半頃には造成され、13世紀後半～14世紀、15世紀、16世紀に改変が行われ近世の島畑に引き継がれたことが明らかになった。江戸時代以後の地層からはワタ・アワ・イネ・オオムギ・コムギ・ウリなどの種子を採集した(当センター)。

城陽市下水主遺跡第4次調査(F地区)では、道路橋脚部の12か所を調査し、平安時代の掘立柱建物3棟、井戸4基、弥生時代後期の竪穴建物2基などを検出した。井戸のうち1基は平安時代前期のもので、井戸枠の構造は方形横板組横棧留で、井戸底には井籠組の水溜施設を持ち、底には礫を敷いている。礫敷きの下には大型の曲物が据えられていた。井戸枠内からは土器のほかには斎串・横櫛・柄杓・木皿などが出土している。柄杓は瓢箪に柄を差し込んで作ったもので4点出土している(当センター)。

八幡市今里遺跡では、中世を中心とする墓地を検出した。平安時代の蔵骨器や中世の石組み火葬遺構や火葬土坑が発見されており、火葬の広まりを示す資料となった(八幡市教育委員会)。

京田辺市松井横穴群第3次調査では、平成23年度から継続で実施している新名神高速道路関連の発掘調査で18基の横穴の調査を実施した。副葬品には須恵器の杯・高杯・台付き長頸壺・横瓶など



写真4 松井横穴 副葬品出土状態



写真5 下水主遺跡 井戸

が多く土師器は少数である。他には耳環、鉄鏃、刀子などがある。出土遺物から6世紀後半から7世紀中ごろまで利用されていたと考えられる。八幡市から京田辺市にかけての低丘陵斜面部には女谷・荒坂横穴群、狐谷横穴群、美濃山横穴群、松井横穴群といった多くの横穴が造られている。石室を用いた群集墳が盛行しない地域であり、他地域との墓制の違いが明らかである(当センター)。

京田辺市^{みやまき}三山木遺跡第6次調査では、奈良時代から平安時代の2時期に分けられる掘立柱建物13棟や井戸跡などが検出された。建物群のうち古い時期の一群は調査地西側に推定されている奈良時代の山陰道の方向と同じであり、古代幹道の方位に規制されていた可能性が指摘できる(京田辺市教育委員会)。

木津川本流の左岸自然堤防上に立地する精華町^{むくのき}椋ノ木遺跡第11次調査では、これまで10回の発掘調査が実施され、縄文時代・古墳時代・平安時代・中世の遺構や遺物が発見されている。とりわけ、平安時代後期から中世にかけては、条里地割に沿って建物が配置されており村落の様子を知ることのできる貴重な遺跡である。本年度の調査地では3面の遺構面を確認することができた。第1面では中世の南北に底を持つ身舎1間×5間の掘立柱建物1棟、1間×3間の掘立柱建物1棟、土器埋納土坑、礫敷き遺構などを検出し、遺物には瓦器、白磁椀、瓦などとともに鉄滓が出土している。本調査地の南に隣接する第8次調査において、鍛冶炉を含む鍛冶関連遺物が発見されていることから調査地付近は工房として利用されていたことがわかった。第2面は周辺地域で古墳や竪穴建物が発見されている遺構面であるが、今回の調査では土坑や柱穴が若干検出できた。第3面は縄文時代の遺構面とされ、若干の縄文時代晩期と考えられる土器が出土した(当センター)。

木津川市^{かせやまじょう}鹿背山城跡では、発掘調査により城域の範囲が南に広がることがわかった。それとともに山城築造以前の鹿山寺^{ろくざんじ}の施設が存在していたこともわかった(木津川市教育委員会)。

木津川市^{くにきゅう}恭仁宮跡では朝堂院南西部における平成24年度の調査で23基の柱穴が発見されていた。平成25年度はその建物の規模や性格を明らかにするためのトレンチが設けられ、5基の柱穴が検出された。その結果、他の都の朝堂が長方形の平面形を持つのに対して、南北5間×東西6間の正方形に近い平面形で、木製の外装基壇を持っていた可能性もあり特異な建物であったことが明らかになった(京都府教育委員会)。

木津川市^{じょうりじ}浄瑠璃寺では、現存する唯一の九体阿弥陀仏をまつる阿弥陀堂を持つ特別名勝・史跡浄瑠璃寺の庭園保存修理事業の一環で発掘調査が実施された。調査によって鎌倉時代以前の州浜が検出されたとともに、昭和の修理における改変点などが明らかになり、整備に向け基礎的なデータを得ることができた(木津川市教育委員会)。

(なかがわ・かずや=当調査研究センター調査課調査第1係長)

美濃山地域出土の古代銅製品に関する研究

－瑞雲双鸞八花鏡を中心として－

村田和弘・引原茂治・関広尚世・大澤正己・鈴木瑞穂

1. はじめに

平成21年度の京都府八幡市女谷・荒坂横穴群の発掘調査で、D支群4号横穴の再利用時と考えられる埋葬面から、瑞雲双鸞八花鏡ずいうんそうらんはっかきょうが一面出土した(以下、女谷鏡)。また、同一の尾根上には美濃山廃寺が位置し、平成23年度の発掘調査で銅の溶解炉や銅塊の出土を確認した。両遺跡は時代的にも地理的にも近接することから何らかの関連性が想定された。また、女谷・荒坂横穴群は「大住」という地域に位置している。「大住」とは南九州の大隅国の大隅に由来し、『和妙類聚抄』にも「大住郷」の記述がみられ、大隅隼人の集住地と考えられている(当調査研究センター2004)。このため美濃山廃寺もこの隼人との関連性が考えられた。

本稿では上記をふまえ、瑞雲双鸞八花鏡を中心にして、両遺跡から出土した銅製品の分析結果を比較検討し、その歴史的意義について述べてみたい。なお、本稿は、3.-2)を日鉄住金テクノロジー(株)八幡事業所TACセンターの大澤正己・鈴木瑞穂が分析・執筆し、それ以外については村田・引原・関広で検討を行い、関広が主体となって執筆した。

2. 瑞雲双鸞八花鏡の検討

1) 瑞雲双鸞八花鏡の概要

瑞雲双鸞八花鏡は「海獣葡萄鏡」、「花文背六角鏡」、「伯牙弹琴鏡」などとともに代表的な唐式鏡の一つである。また、副葬品・鎮壇具・地鎮具として奈良時代～平安時代初期に用いられ、寺社の宝物としても伝世する(表1)。

その分布範囲は、東は千葉県香取市の香取神宮から、西は宮崎県東諸県郡の本庄古墳群まで、全国で12地点にわたる(絵図や拓本で確認されたものを除く)。後述する女谷・荒坂横穴群出土例を含めると全部で13地点で、出土品や伝世鏡が確認できる(表1 No.1～16)。これらのうち、本庄鏡と山の神鏡については現物の所在が不明、もしくは戦災により消失のため、実際に現物が確認できるのは14面である。なお、香川県綾歌郡の岡田家蔵で江戸時代の松平定信著『集古十種』記載例と、福岡県古賀市三学院蔵で国学者青柳種信著『古器物図』記載例の2例については現物が存在しない。また、三宝院蔵鏡と小川白楊蔵鏡は拓本のみであり、面径等の記載はあるものの、詳細は不明である(表1 No.17～20)。

表1 瑞雲双鸞八花鏡一覧

No.	鏡名	面径	出土・伝世地	所蔵	備考
1	本庄	12.3 cm	宮崎県東諸県郡国富町 本庄古墳群内から出土	不明（福島道明氏旧蔵）	
2	大久保	12.0 cm	長野県岡谷市成田町 大久保2号墳墓出土	長野県教育委員会 長野県埋蔵文化財センター	
3	霊安寺2号	11.9 cm	奈良県五條市霊安寺 霊安寺塔址出土	奈良国立博物館	
4	神門1号	11.8 cm	宮崎県東臼杵郡美郷町 神門神社	神門神社	伝世鏡
5	香取	11.8 cm	千葉県香取市香取 香取神宮	香取神宮	伝世鏡
6	霊安寺1号	11.6 cm	奈良県五條市霊安寺 霊安寺塔址出土	奈良国立博物館	
7	神門2号	11.6 cm	宮崎県東臼杵郡美郷町 神門神社	神門神社	伝世鏡
8	神門3号	11.7 cm	宮崎県東臼杵郡美郷町 神門神社	神門神社	伝世鏡
9	平城京	11.5 cm	奈良県奈良市二条町 二条大路北側溝S D5240	奈良文化財研究所	
10	南滋賀	12.0 cm	滋賀県大津 南滋賀出土	近江神宮	
11	坂田寺	11.4 cm	奈良県高市郡明日香村 坂田寺出土	奈良文化財研究所	
12	女谷	11.2 cm	京都府八幡市美濃山御毛通 女谷横穴D支群4号横穴出土	京都府埋蔵文化財調査研究センター	
13	金谷	11.0 cm	兵庫県宍粟郡山崎町金谷 湯船口金谷1号墳	東京国立博物館	
14	周山	9.5 cm	京都市右京区京北 周山廃寺	東京国立博物館	内区のみ
15	村山	-	岐阜県高山市国府町村山	個人蔵	不時発見 懸架状態
16	山の神	11.4 cm	三重県桑名郡多度町 山の神址出土	伊東晴夫氏所蔵	拓影の計測
17	岡田家蔵	-	香川県綾歌郡綾川町陶 岡田官兵衛家蔵	『集古十種』記載	
18	三学院	11.4 cm	福岡県古賀市	福岡市博物館蔵絵図	拓影の計測
19	三宝院	11.4 cm	いずれの三宝院か不明	広瀬都巽拓本集第23号 『寶鏡拓本集』収載	拓影の計測
20	小川白楊蔵	12.4 cm	出土地不明	広瀬都巽拓本集第47号 『伽羅丹敷』下巻 収載	拓影の計測

2) 瑞雲双鸞八花鏡の研究

後藤守一は「花枝双鸞八花鏡」として、初めて瑞雲双鸞八花鏡に言及した(後藤守一1931)。そして、瑞雲双鸞八花鏡という用語を用いたのは梅原末治である(梅原末治1950)。

瑞雲双鸞八花鏡は、唐式鏡を構成する一型式として論じられる傾向にあったが、瑞雲双鸞八花鏡に特化した研究を行ったのは片山昭悟であった。また、杉山洋は踏み返し時の縮小率の理論化を行い、踏み返し段階の設定を客観的に行った。さらに奈良文化財研究所は、1989年に実施した平城京出土の瑞雲双鸞八花鏡を含め、同鏡4面を分析調査した。本項では、女谷・荒坂横穴墓群出土鏡の評価をより効果的に行うために近年の研究成果とその概要を示しておきたい。

(1) 片山昭悟による研究

片山昭悟は、宮崎県東諸県郡の本庄鏡は、国内で確認されている瑞雲双鸞八花鏡の中で最大の面径をもち、かつ文様が明瞭であることから、舶載鏡と考えた。また、同鏡を原型として踏み返

表2 瑞雲双鸞八花鏡の踏み返し段階

段階	種別および鏡の状況	実例
I段階	舶載鏡	本庄鏡
II段階	舶載鏡の特徴を持った日本で作られた鏡	大久保鏡・霊安寺2号鏡
III段階	日本で踏み返しされた鏡	神門1号鏡・香取鏡
IV段階	IIIとほぼ同時期であるが径が小さい鏡	神門2号鏡・神門3号鏡・霊安寺1号鏡
V段階	時期的に新しく多量に踏み返された鏡	平城京鏡・南滋賀鏡・山の神鏡・坂田寺鏡・金谷鏡

しが行われたとした。

踏み返しの段階を片山氏は表2のようにI～V段階に分けた。第II段階と第IV段階にみられる霊安寺鏡はいずれも近畿地方のものであるとするが、1号鏡と2号鏡で面径が異なることや、文様構成と范傷などから同一工房のものではないと結論付ける。2号鏡は、長野県岡谷市成田町の大久保B遺跡2号墳墓より出土した大久保鏡と関連するとし、1号鏡を踏み返したものが、平城京鏡・南滋賀鏡・山の神鏡・坂田寺鏡・金谷鏡であるとした。そして、本稿では詳しく触れないが、他の鏡の文様構成や范傷の状況も考慮すると、16面の瑞雲双鸞八花鏡が、神門タイプ・大久保タイプ・霊安寺タイプの3群に分けられるとする(片山昭悟1992)。

(2) 杉山洋による研究

片山昭悟が面径による比較を行ったのに対し、杉山洋は鏡背の文様間など、10か所前後のポイントを選び計測を行った。縮小率を数値化し、それらの値を偏差値に置き換えて鏡固有の値とした。偏差値平均のまとまりをもとに鑄造の順番を推定、鑄造段階を設定した。これにより、現存する瑞雲双鸞八花鏡12面を3系列4段階に分類した。これは片山分類の原型鏡段階を除くと双方の分類が一致することになり、杉山の手法が踏み返し段階の設定を客観化したと評価できる。

杉山氏は、兵庫県丹波市春日町多利前田遺跡出土の唐草双鳥鏡の踏み返し実験で、和鏡や唐鏡の違い、鏡の厚さや外縁形状の違いを考慮する必要があるが、おおむね98%という縮小率を得た。また、踏み返し段階ごとの縮小理論値として、A段階98.7%、B段階97.4%、C段階96.2%、D段階94.9%である。また、こうした分類から片山氏と同様、神門系列・霊安寺系列・大久保系列に分類し、これまで畿内で踏み返されたものが全国に流通したと考えられていたが、少なくとも「中央」で製作された唐式鏡だけではないことを明らかにした。また、畿外の製作地として日向を想定した(杉山洋1989・2003)。

(3) 奈良文化財研究所による研究

畿内で出土した瑞雲双鸞八花鏡については、奈良文化財研究所が2009年に霊安寺出土鏡(2面)、坂田寺出土鏡、二条大路(平城京)出土鏡の計4面について蛍光X線分析を含めた調査・研究を行っている。

【霊安寺出土鏡】 霊安寺は、奈良県五條市霊安寺町に位置する。河原石の乱石積基壇をもつ塔跡が検出され、心礎と思われる基壇中央の扁平な緑泥片岩の南西隅から遺物が出土した。これらの遺物は伯牙弹琴鏡1面・花禽双鸞八稜鏡1面・瑞雲双鸞八花鏡2面・響銅椀1点・開元通寶1

点・萬年通寶1点・隆平永寶1点からなり、塔跡基壇築成のための地鎮・鎮壇具と考えられている。延暦15(796)年初鑄の隆平永寶が出土していることから、9世紀初頭の建立と考えられる。瑞雲双鸞八花鏡は2面とも保存状況は良好であるが、片山氏が2号鏡と呼んだ鏡は鏡背の文様が明瞭に鑄出されていない。

蛍光X線分析の結果、銅が80%半ば、錫が少なく、鉛は若干ばらつきがあるが4～7%台、砒素3～4%という特徴的な割合を持つ鏡であることが判明した。いわゆる低錫青銅鏡である。靈安寺出土瑞雲双鸞八花鏡以外の2面についても分析が行われ、上記に類似した成分比を持つ鏡であることが判明している。このことから異型式の鏡でも同一の工房で制作されたものと推定されている(奈良文化財研究所2009)。

【坂田寺出土鏡】坂田寺は、奈良県明日香村坂田に位置する。昭和55年に実施された第3次調査で桁行7間、梁間4間の礎石建物が検出された。この建物は中央3間分に円形柱座を作り出した礎石や格狭間を彫り込んだ凝灰岩縁石で仕切られた須弥壇をもつ仏堂と考えられている。須弥壇築成直前で、鏡・金箔・水晶玉・琥珀玉・瑠璃玉・錢貨・刀子・銅製挟子・灰釉双耳瓶が鎮壇具として安置された。錢貨は和同開珎・萬年通寶・神功開寶であり、次の隆平永寶がないことから、同錢貨の初鑄年である延暦5(796)年以前と考えられている。

坂田鏡は靈安寺鏡と異なり、錫の高い含有率を示すことが判明した。銅は60%前後、錫20%前後、鉛と砒素が4～6%を含む。いわゆる高錫青銅鏡である。また、銀が1%中頃の数値を示しており、特徴的である(奈良文化財研究所2009)。

【二条大路出土鏡】同鏡は奈良文化財研究所が奈良県奈良市二条大路南一丁目で実施した平城宮第198次B区二条大路北側溝S D5240の最上層から出土した。S D5240は調査の結果、奈良時代～平安時代の条坊側溝と考えられており、同鏡は最上層から出土したことから、8世紀後半～9世紀前半のものと推定されている。

二条鏡は、銅88%、錫3%前後、鉛4%前後、砒素3%前後でどちらかというとも靈安寺鏡に近い低錫青銅鏡であることが判明した(奈良文化財研究所2009)。

以上の研究から、奈良時代の同型鏡には砒素が含まれ、高錫青銅鏡と低錫青銅鏡の2群が存在することが判明した。

3)女谷・荒坂横穴群出土の瑞雲双鸞八花鏡について

(1)女谷・荒坂横穴群の概要

女谷・荒坂横穴群は、第13次までの発掘調査で80基以上の横穴墓が調査されている。府内最大規模を有する横穴群で、女谷横穴群はA～Dの4支群、荒坂横穴群はA～Cの3支群からなる。横穴の築造時期は、古墳時代後期～飛鳥時代末であり、一部の横穴墓において、平安時代に埋葬施設として再利用されていることが判明している。

瑞雲双鸞八花鏡が出土したのは、第12次調査で検出した女谷D支群4号横穴である(以下、女谷D4号横穴)。本横穴は平面が羽子板形を呈し、全長15.7m、玄室長3.5m、玄室幅2m、墓道長12.2m、墓道最大幅1.9mを測る。主軸はN49°Wである。出土須恵器の型式からTK209～TK

217併行期に築造されたと考えられ、土層の堆積状況から9世紀頃に再利用されたことがわかっている(当調査研究センター2011)。

表3 本研究面径計測

	片山氏計測	本研究計測
霊安寺1号墳	11.6cm	11.55～11.65cm
霊安寺2号墳	11.9cm	12.0cm

(2) 女谷D4号横穴出土瑞雲双鸞八花鏡の概要

本共同研究では、前項で述べた女谷D4号横穴の再利用面から土師器や布目瓦とともに出土した瑞雲双鸞八花鏡を対象とした。同鏡の面径は11.2cmで、厚さ0.1～0.7cmを測る。外区には雲文と花文を交互に配するが湯回りが悪く、周囲の半分は文様が鑄だされていない。巻頭の図版下段写真のように鏡面には紙の痕跡があり、紙に包んで埋納されたと考えられる(当調査研究センター2011)。

(3) 霊安寺鏡と女谷鏡の比較調査について

先にも述べたように、畿内で確認されている瑞雲双鸞八花鏡は、霊安寺1号鏡を踏み返したものである可能性が高い。このため、女谷鏡との比較を目的として奈良国立博物館での資料調査を実施した。霊安寺鏡の面径や文様構成については既存研究にもあるが、再計測を行った。この結果、面径にわずかな差がみられることが判明した(表3)。

霊安寺1号鏡の瑞雲双鸞文は非常に明瞭であり、均整がとれている。一方、霊安寺2号鏡は1号鏡に比べて文様が崩れている。外形は1号鏡にばらつきが認められる。文様の形式的検討および直径を考慮すると、少なくとも杉山氏の言う段階では「霊安寺1号鏡→霊安寺2号鏡→女谷鏡」と考えることができるが、これまで畿内で出土した例が、霊安寺1号鏡の系列であるという以外に、本比較調査では女谷鏡を評価できる点はない。

3. 美濃山廃寺出土の炉壁と銅塊の分析について

1) 美濃山廃寺と出土炉壁・銅塊の概要

美濃山廃寺では、新名神高速道路整備事業ほかに伴う第6～9次調査で、掘立柱・礎石併用建物をはじめ、掘立柱建物群・瓦窯等を検出した。これらの遺構は、7世紀末～9世紀初頭までⅣ期6区分の変遷をたどったと推定されている。第6次調査では丘陵南東部から東部にかけて、瓦窯とともにA地区南部で鉄器生産関連遺構群、B地区で銅溶解炉S L 1を検出した。調査成果から、鉄器生産関連遺構群はⅠ期(7世紀後半～8世紀初頭)、銅溶解炉はⅡ-1期(8世紀前半)に属すると考えられる。

本共同研究では、鉄器生産関連遺構群の中でもB期(下層遺構群)遺構面で検出した溶解炉S L 511で出土した炉壁片2点と、溶解炉S L 1に近接する溝S D 7から出土した銅塊1点を対象とした。炉壁は68×50×23mm、重さ35.2gと、42×26×22mm、重さ33.2gを測る。また、銅塊は42×26×22mm、重さ33.2gを測る。

2) 美濃山廃寺出土の炉壁と銅塊の化学分析について

(1) 分析の経緯

本共同研究では、女谷鏡およびS L 511出土炉壁2点とS D 7出土銅塊1点について、日鉄住

金テクノロジー(株)八幡事業所TACセンターに依頼し、理化学分析を行った。調査項目は肉眼観察・マクロ組織観察・顕微鏡組織観察・ビッカース断面硬度測定・EPMA調査・化学組成分析の6項目にわたる。各分析の手法とその結果については下記の通りである。

(2)分析の成果

美濃山廃寺は京都府八幡市美濃山古寺に所在する。第6次調査B地区ではⅡ-1期(8世紀前半)の铸造用溶解炉跡1基(SL1)が検出された。共伴する鑄銅関連遺物の分析調査も実施されている(当調査研究センター2013A・B)。また、Ⅰ期(7世紀後半～8世紀初頭)に推定される土坑(SL511)からも多量の鑄銅関連遺物が出土した。このため鑄造に関わる遺構の可能性が指摘されている。そこで当遺跡のⅡ期の鑄造生産の実態を検討する目的から再度調査を実施することになった。

さらに今回は比較検討のため、美濃山廃寺に近接する女谷D4号横穴から出土した瑞雲双鸞八花鏡の調査もあわせて実施した。

a)調査方法

【供試材】

表4に示す。資料符号NMY-5~7・D-4の鑄銅関連遺物計4点の調査を行った(MNY-1~4は2011年に分析し、詳細は報告済みである。当調査研究センター2013A)。

【調査項目】

- ①肉眼観察 遺物の外観上の特徴を簡単に記載した。
- ②マクロ組織 本来は肉眼またはルーペで観察した組織であるが、本稿では顕微鏡埋込み試料の断面全体像を低倍率で撮影したものを指す。当調査は顕微鏡検査によるよりも、広い範囲にわたって組織の分布状態、形状、大きさなどの観察ができる利点がある。
- ③顕微鏡組織 金属部の組織観察などを目的とする。試料観察面を設定・切り出し後、試験片

表4 供試材の履歴と調査項目

符号	遺跡名	遺構名	遺物名称	推定年代	計測値		メタル度	調査項目								備考
					大きさ	重量		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	
MNY-1	美濃山 廃寺	炉1(東側アゼ第1層)	銅塊	8c 中頃	41×35×12 mm	55.0 g	L(●)	○	○			○	○			2011年 分析調査 実施
MNY-2		炉1第2層	銅塊		43×35×15 mm	56.9 g	L(●)	○	○			○	○			
MNY-3		炉1内サブトレンチ	ガラス質滓(緑青付)		28×20×8 mm	6.9 g	M(◎)	○	○			○				
MNY-4		炉1 No.1	炉壁(底部緑青付)		60×54×24 mm	64.2 g	なし	○	○			○				
MNY-5		鍛冶炉区SK11 No.1	炉壁	7c 後半 ～ 8c 初頭	68×50×23 mm	35.2 g	なし		○			○				
MNY-6		鍛冶炉区SK11 炭・焼土	炉壁		78×52×26 mm	65.3 g	なし		○			○				
MNY-7		SD07	銅塊		42×26×22 mm	33.2 g	L(●)	○	○			○	○			
D-4	女谷	D支群4号横穴	八花鏡	8c 後半	直径112、 厚さ1~7 mm	—	L(●)	○	○			○	○			

調査項目内訳 ①マクロ組織 ②顕微鏡組織 ③ビッカース断面硬度 ④X線回析
⑤EPMA ⑥化学分析 ⑦耐火度 ⑧カロリー

は樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の3 μm と1 μm で鏡面研磨した。

観察には金属反射顕微鏡を用い、特徴的・代表的な視野を選択して、写真撮影を行った。なお銅(または銅合金)の腐食(Etching)には、酢酸・硝酸・アセトン混合液を用いた。

④ビッカース断面硬度 ビッカース断面硬度計(Vickers Hardness Tester)を用いて硬さの測定を行った。試験は鏡面研磨した試料に136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除した商を硬度値とする。試料は顕微鏡用を併用した。

⑤E P M A (Electron Probe Micro Analyzer) 調査 銅(または銅合金)組織の組成調査を目的とする。試料面(顕微鏡試料併用)に真空中で電子線を照射し、発生する特性X線を分光後に画像化し定性的な結果を得る。さらに標準試料とX線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行う方法である。反射電子像(COMP)は、調査面の組成の違いを明度で表示するものである。重い元素で構成される物質ほど明るく、軽い元素で構成される物質ほど暗い色調で示される。これを利用して組成の違いを確認後、定量分析を実施した。

⑥化学組成分析 供試材の分析は次の方法で実施した。

銅(Cu)、錫(Sn)、鉛(Pb)、鉄(Fe)、砒素(As)、アンチモン(Sb)、ビスマス(Bi)。I C P (Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer)：誘導結合プラズマ発光分光分析法。

b) 調査結果

【MNY-5：炉壁】

①肉眼観察：熱影響を受けて内面が薄くガラス質化した、鑄造用溶解炉の炉壁破片(35.2g)と推定される。ガラス質滓表層は弱い流動状で、細かい凹凸がみられる。酸化銅の影響が広い範囲でやや赤みを帯びる。また表層には微細な黒灰色の付着物が僅かに点在しており、溶着金属の銹化物の可能性が考えられる。胎土部分は淡褐色の粘土質でやや脆い質感である。胎土中には微細な砂粒(石英・長石等の無色鉱物主体)が含まれており、さらにスサが多量に混和されている。

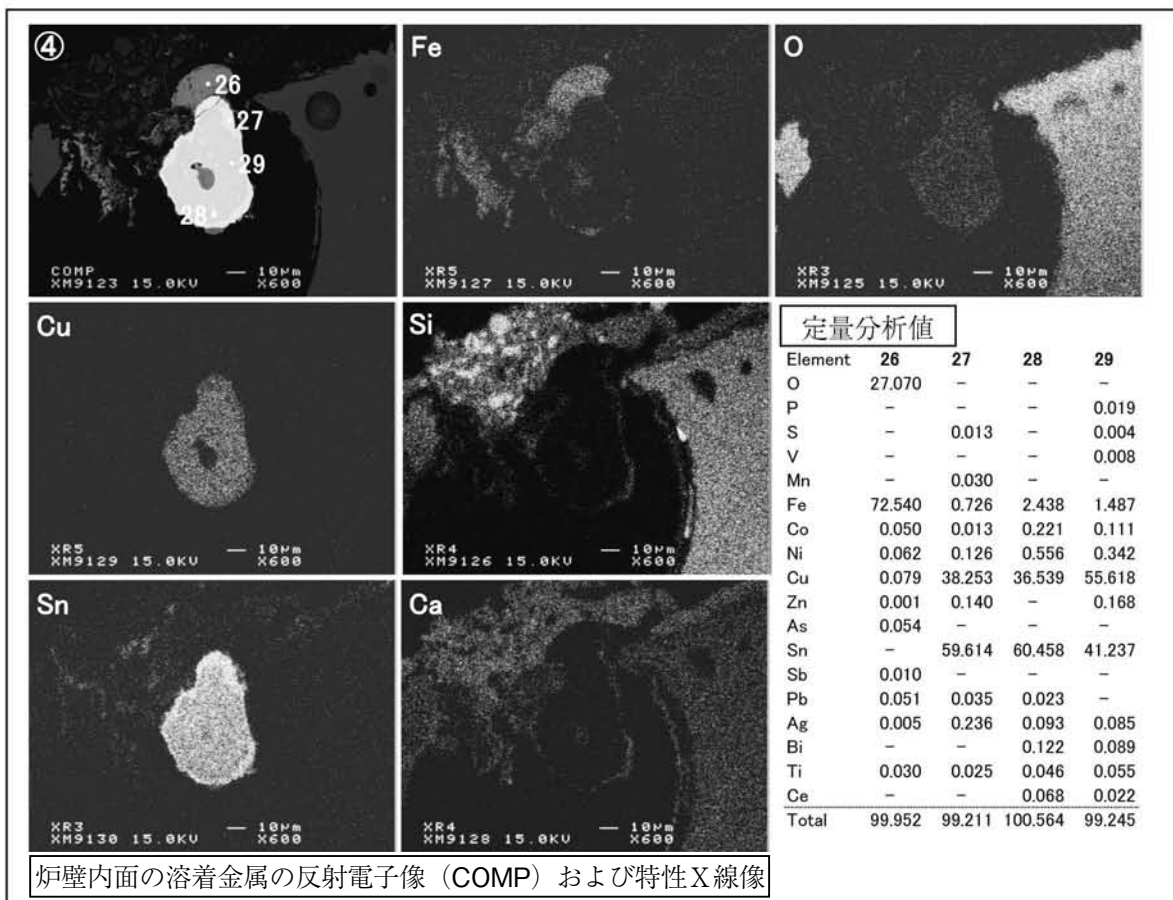
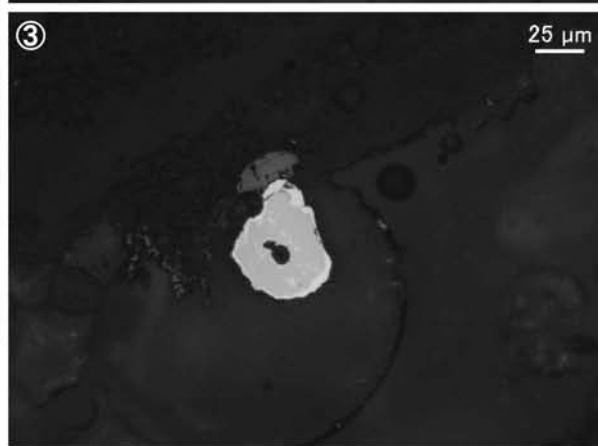
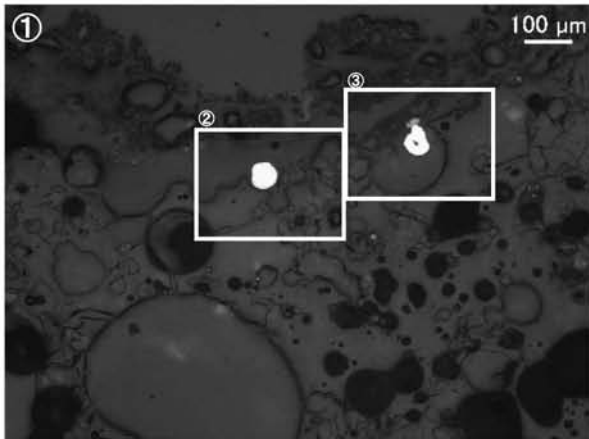
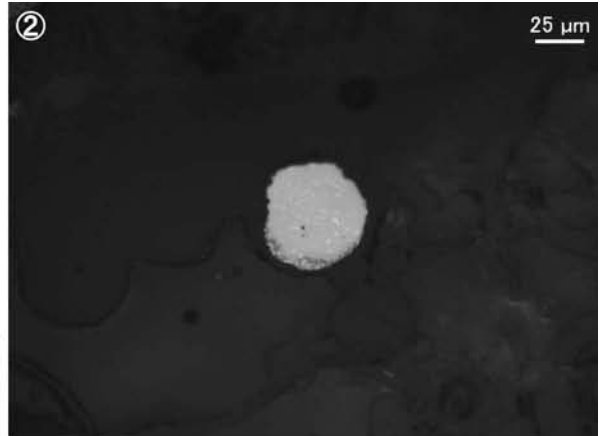
②顕微鏡組織：内面表層のガラス質滓部分を写真1-①～③に示す。熱影響を受けて粘土鉱物は完全に非晶質化しているが、石英・長石類などの微細な砂粒が残存する。また滓中には微細な明灰色～淡黄色の金属粒が点在する。②・③はその拡大である。

③E P M A 調査：写真1-④に金属粒(写真1-③と同一視野)の反射電子像(COMP)を示す。金属粒表層に付着する灰褐色部は、特性X線像では鉄(Fe)、酸素(O)に強い反応がある。定量分析値は72.5%FeO-27.1%Oであった(分析点26)。マグネタイト(Magnetite:Fe₃O₄)に同定される。

また金属粒の外周および内部に点在する淡黄色部は、特性X線像をみると錫(Sn)に強い反応がある。定量分析値は38.3%Cu-59.6%Sn(分析点27)、36.5%Cu-60.5%Sn-2.4%Fe(分析点28)であった。一方素地の淡灰色部は特性X線像では銅(Cu)の反応が強く、錫は外周部と比較するとやや反応が弱い。定量分析値は55.6%Cu-41.2%Sn-1.5%Fe(分析点29)であった。

内面表層に溶着した金属銹化物のE P M A 調査結果から、当炉壁は青銅鑄物(Cu-Sn合金)の溶解・鑄造に用いられたと判断される。定量分析値をみると錫(Sn)の含有率が非常に高く、溶

MNY-5 炉壁
 ①～③内面表層がラズ質
 滓、溶着金属:高錫
 (Sn) 青銅



炉壁内面の溶着金属の反射電子像 (COMP) および特性X線像

写真1 炉壁MNY-5の顕微鏡組織・E PMA調査結果

湯の平均的な成分を反映したものとは考え難いが、高錫青銅鑄物の製作に用いられた可能性が高いと判断される。

【MNY-6：炉壁】

①肉眼観察：内面が薄くガラス質化した、鑄造用溶解炉の炉壁破片(65.3g)と推定される。ガラス質滓表層は弱い流動状で黒色～赤褐色を呈する。また僅かに青緑色の銹化物が付着する。胎土部分は淡褐色の粘土質で、炉壁(MNY-5)と同様かなり脆い質感である。胎土中には微細な砂粒(石英・長石等の無色鉱物主体)とスサが多量に混和されている。

②顕微鏡組織：写真2-①～③、写真3-①・②に示す。写真2-①の上側は比較的大形の溶着金属(長径約3mm)の銹化物で、写真2-②・③はその拡大である。内部には網目状の金属組織痕跡が残存する。後述のE P M A調査結果から、網目状明色部は銅、錫を主成分とする $\alpha + \delta$ 共析組織、素地はより錫の割合の高い銹化物と推定される。また、写真2-①の下側は炉壁内面表層部である。粘土鉱物はガラス質化が進んでいるが、混和された石英・長石類が多数散在する。写真3-①・②はその拡大である。表層には上記の溶着金属(銹化物)粒以外にも多数の非常に微細な溶着金属(明白色粒)が付着する。

③E P M A調査：写真2-④に銹化金属部の反射電子像(COMP)を示す。網状明白色部は特性X線像をみると銅(Cu)と錫(Sn)に反応がある。定量分析値は63.5%Cu-32.5%Sn(分析点30)、17.0%Cu-61.7%Sn-26.6%O(分析点31)であった。一方素地部分は錫(Sn)、酸素(O)に強い反応がある。定量分析値は3.6%Cu-67.0%Sn-27.3%O(分析点32)、4.1%Cu-69.9%Sn-25.7%O(分析点33)であった。錫(Sn)の割合の高い銹化物であり、腐食に伴い銅(Cu)が溶出したものと推測される。

もう1視野、写真3-③に溶着金属粒の反射電子像(COMP)(写真3-②と同一視野)を示す。内側の明色部は特性X線像では銅(Cu)、錫(Sn)に強い反応がある。定量分析値は63.4%Cu-33.1%Sn(分析点34)である。一方外周の暗色部は特性X線像をみると、銅(Cu)の反応が弱い。定量分析値は16.0%Cu-59.8%Sn-25.4%O(分析点35)であった。高錫青銅であり、外周部は腐食に伴い銅(Cu)が溶出したと推測される。また素地部分の定量分析値は63.1%SiO₂-18.0%Al₂O₃-1.2%CaO-1.9%K₂O-6.4%SnO₂-5.2%FeO(分析点2)であった。ガラス質滓(非晶質珪酸塩)中にも錫(Sn)の影響がみられる。

以上の調査結果から、当炉壁は炉壁(MNY-5)と同様、高錫青銅鑄物の製作に用いられたと判断できる。溶着金属の腐食に伴い銅(Cu)が溶出しているため、製品の合金比について言及することは困難であるが、内部に網目状の $\alpha + \delta$ 共析組織の痕跡が確認された。

【MNY-7：銅塊】

①肉眼観察：表面全体が緑青に覆われた小形の銅、または青銅塊(33.2g)である。1面は木炭痕による凹凸が目立ち、部分的に木炭繊維も付着している。木炭の隙間で生じた不定形の溶銅塊の可能性が考えられる。重量感があり、特殊金属探知器のL(●)で反応するため、内部には金属が良好に残存すると推察される。

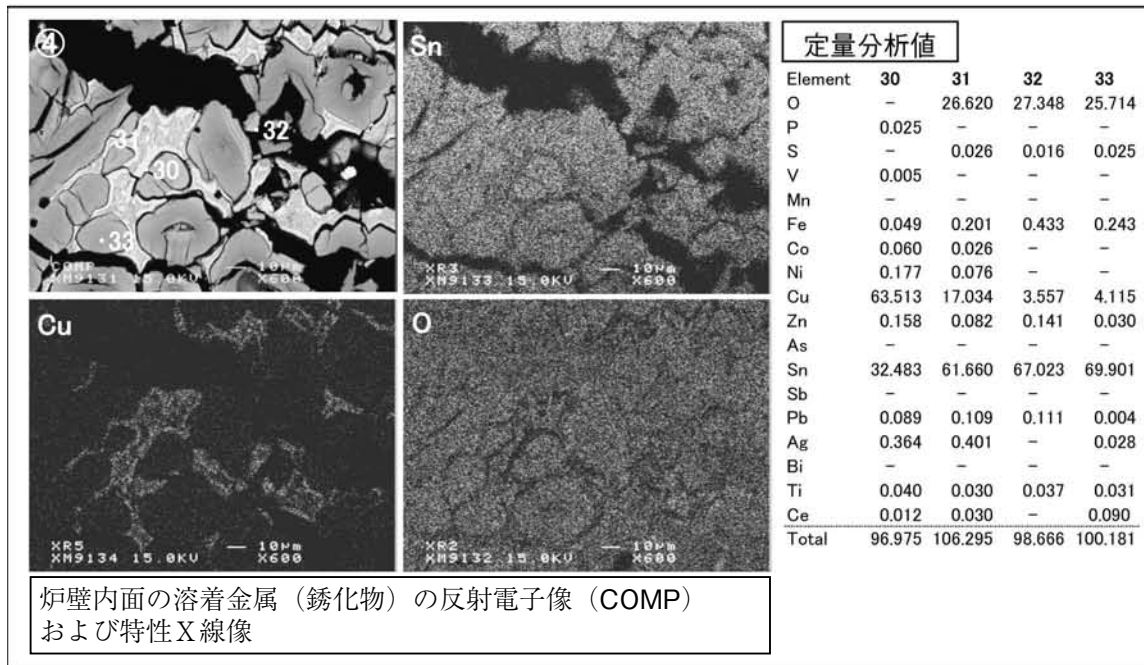
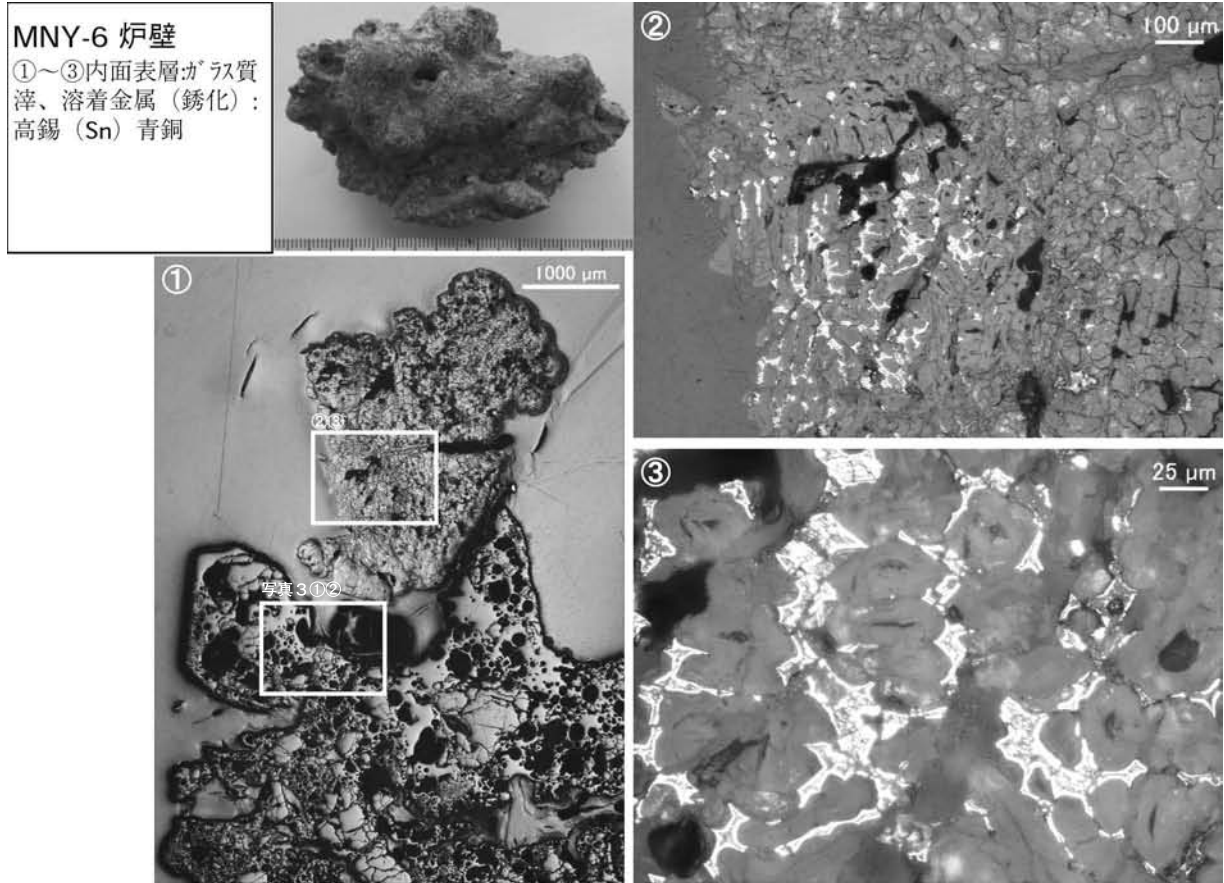


写真2 炉壁MNY-6の顕微鏡組織・A PMA調査結果

②マクロ組織：写真4-①に示す。酢酸・硝酸・アセトン混合液で腐食した組織を示す。樹枝状初晶および多角形結晶が析出する。

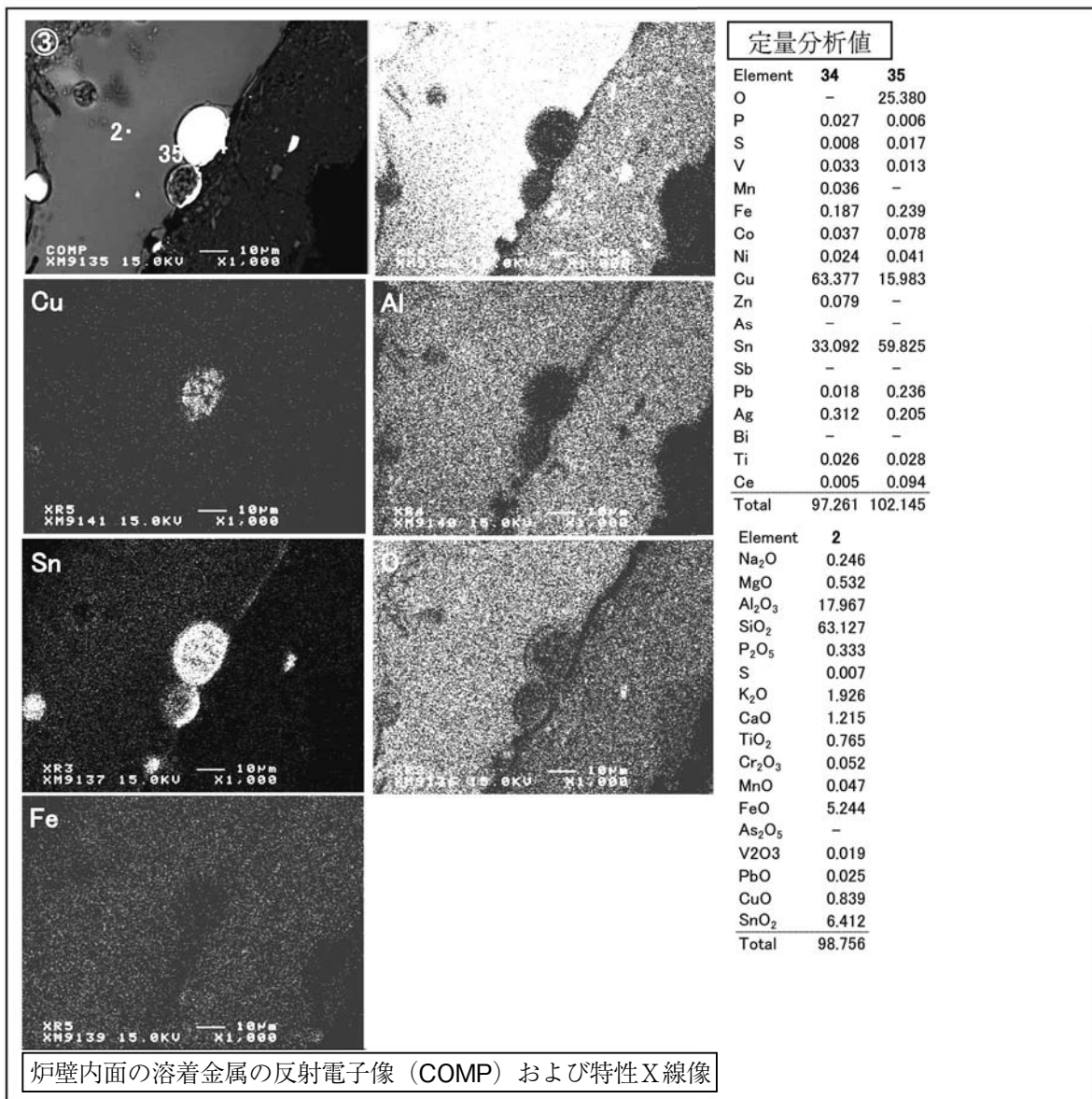
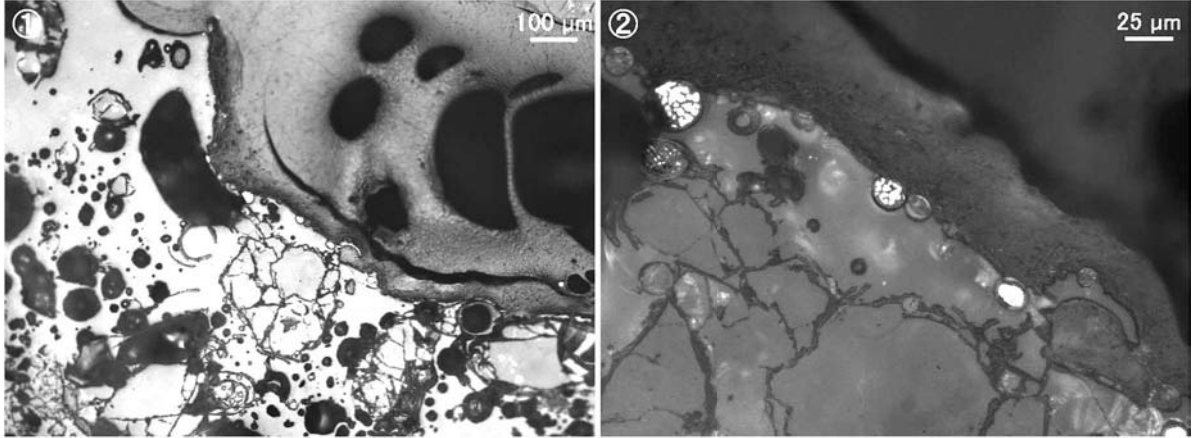


写真3 炉壁MNY-6の顕微鏡組織・EPMA調査結果

③顕微鏡組織：写真4-②・③に示す。①中央の金属組織の拡大である。結晶粒界に点在するごく暗灰色部は鉛(Pb)、淡青灰色粒は白鉛(Cu₂S)、微細な明白色粒は銀(Ag)主体の相と推定される。

④EPMA調査：写真4-④に反射電子像(COMP)を示す。金属顕微鏡下では砒素(As)の偏析相は明瞭ではないが、局所的に青白色部が確認された。特性X線像でもその青白色部と対応して砒素(As)に反応がみられる。定量分析値は78.9%Cu-14.3%As-2.9%Sb(分析点36)、64.5%Cu-28.2%As-7.9%Sb(分析点41)で、砒素(As)、アンチモン(Sb)を高い割合で含んでいる。粒状灰色(反射顕微鏡下では青灰色)部は、特性X線像では硫黄(S)に強い反応がある。定量分析値は75.8%Cu-1.1%Fe-19.8%S(分析点37)であった。白鉛(Cu₂S)に同定される。反射顕微鏡下の明白色(反射顕微鏡下では暗灰色部)は、特性X線像をみると鉛(Pb)に強い反応がある。定量分析値は61.0%Pb-8.6%Cu-1.6%As-9.5%S-13.6%Oであった(分析領域39)。鉛の銹化物と推定される。銅などの他の元素は周囲の影響を受けた可能性が高いと考えられる。また素地部分の定量分析値は92.7%Cu-3.0%As(分析点40)であった。砒素銅である。

⑤化学組成分析：表5に示す。分析用供試材を約0.02gに二分して、それぞれ測定を実施した。いずれの試料も酸分解により完全に溶解し、未溶解物は生じなかった。分析値は2点とも近似している。上述の金属組織観察結果からも予想されたように、大きな成分の偏析は見られなかった。

銅(Cu)が93.5%、90.9%と比較的高い割合であった。一方、錫(Sn)は0.90%、0.98%、鉛(Pb)も0.83%、1.38%と低い割合で、鉄(Fe)も0.07%、0.08%と低値であった。これに対して、砒素(As)が2.83%、2.80%と高めである。他の随伴微量元素としてはビスマス(Bi)0.42%、0.48%、銀(Ag)0.18%、0.20%の高値傾向が顕著であった。

当銅塊は砒素を3%弱含む砒素銅であった。錫(Sn)、鉛(Pb)の割合はごく低い。鑄造用溶解炉跡(SL1)出土銅塊(MNY-1・2)と成分は近似する。

【D-4：瑞雲双鸞八花鏡】

①肉眼観察：表面全体が緑青に覆われた、完形の瑞雲双鸞八花鏡(直径11.2cm、厚さ0.1~0.7cm)である。鏡背の内区には向かい合う2羽の鳥や雲紋様、外区には雲文と花文が交互に配置されている。ただし外区の約半周分の紋様は鑄出されてなく、湯まわりが悪かった可能性が指摘されている。今回外縁部から試料を採取して調査を実施した。

表5 供試材の化学組成

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	銅(Cu)	錫(Sn)	鉛(Pb)	鉄(Fe)	砒素(As)	アンチモン(Sb)	ビスマス(Bi)	銀(Ag)
MNY-1		炉1(東側アゼ第1層)	銅塊	8c	96.3	0.62	0.84	0.07	1.90	0.12	0.22	0.06
					96.2	0.72	0.91	0.09	2.04	0.16	0.25	0.06
					94.9	0.56	0.82	<0.07	1.84	0.09	0.21	0.06
MNY-2	美濃山麿寺	炉1第2層	銅塊		93.4	0.95	2.64	<0.07	3.06	0.26	0.27	0.12
					94.6	0.93	2.44	<0.07	3.04	0.25	0.28	0.13
					93.6	0.94	2.45	<0.07	3.01	0.21	0.26	0.13
MNY-7		SD07	銅塊	7c後半 8c初頭	93.5	0.90	0.83	0.07	2.83	<0.2	0.42	0.18
					90.9	0.98	1.38	0.08	2.80	<0.2	0.48	0.20
D-4	女谷	D支群4号横穴	八花鏡	8c後半	68.3	0.77	11.56	1.18	12.12	<0.2	0.20	0.05
					64.8	0.80	14.24	1.21	12.80	<0.2	0.22	0.04

MNY-7 銅塊
 ①マクロ組織、酢酸・硝酸・7％etch
 ②③金属組織、樹枝状結晶+多角形結晶:砒素銅 (Cu-As系)、硫化銅 (CuS₂)、硫酸鉛 (PbSO₄)

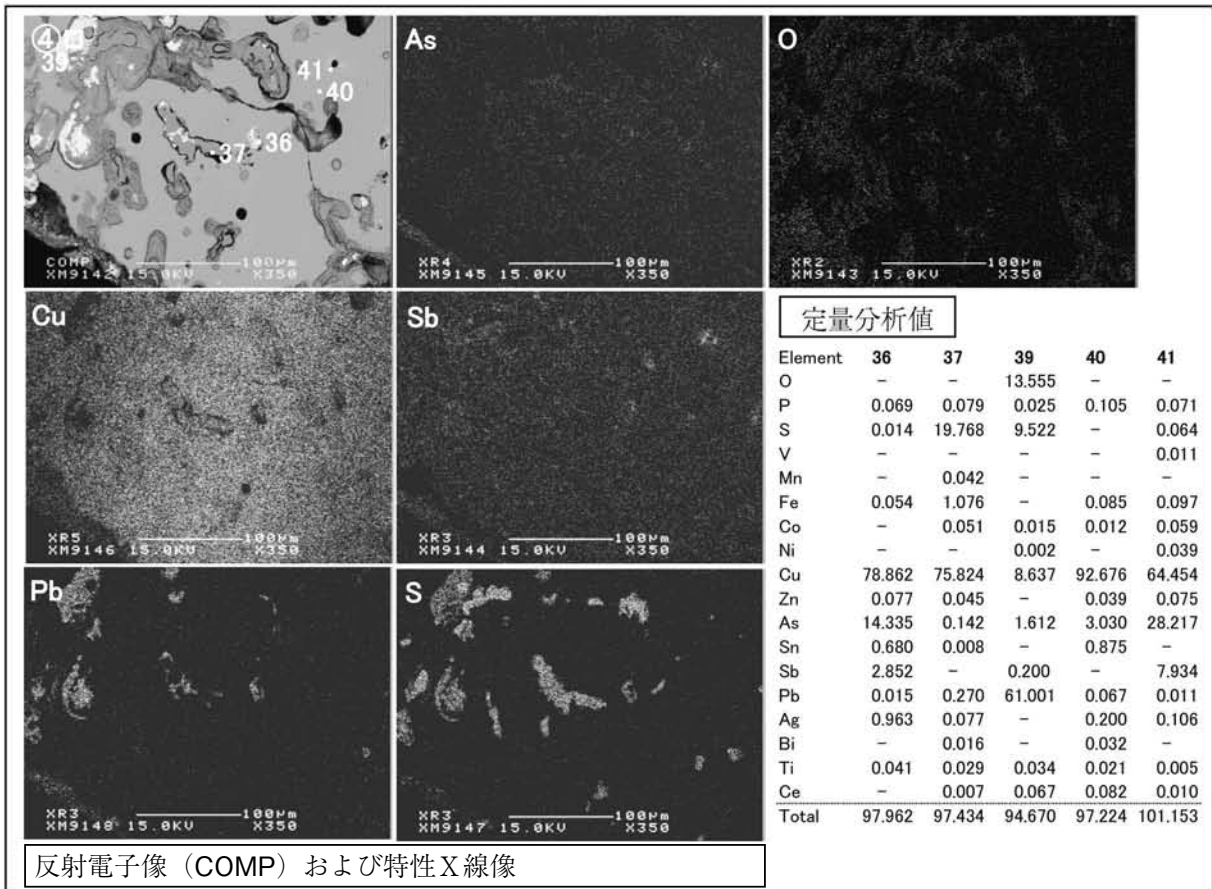
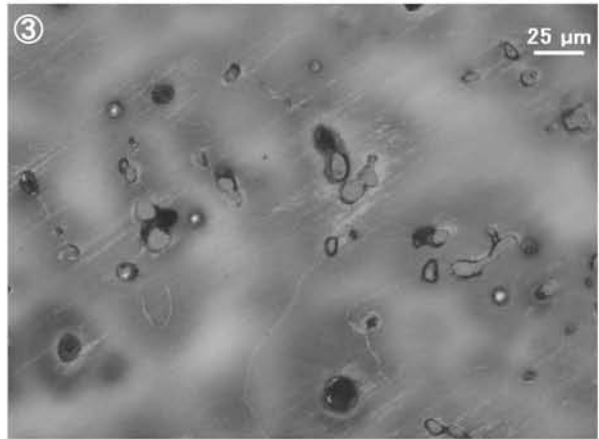
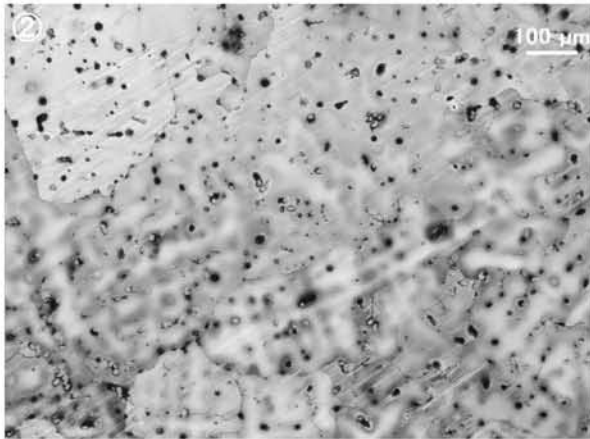
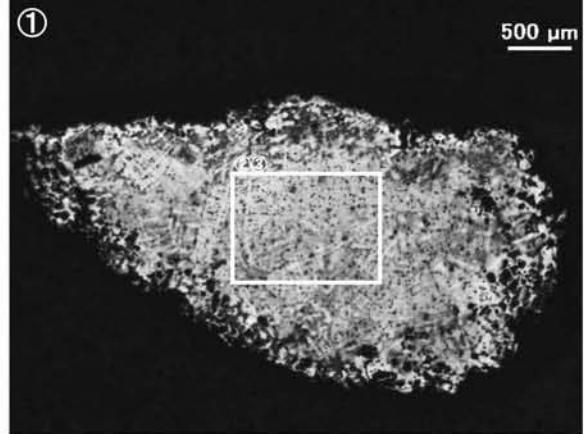
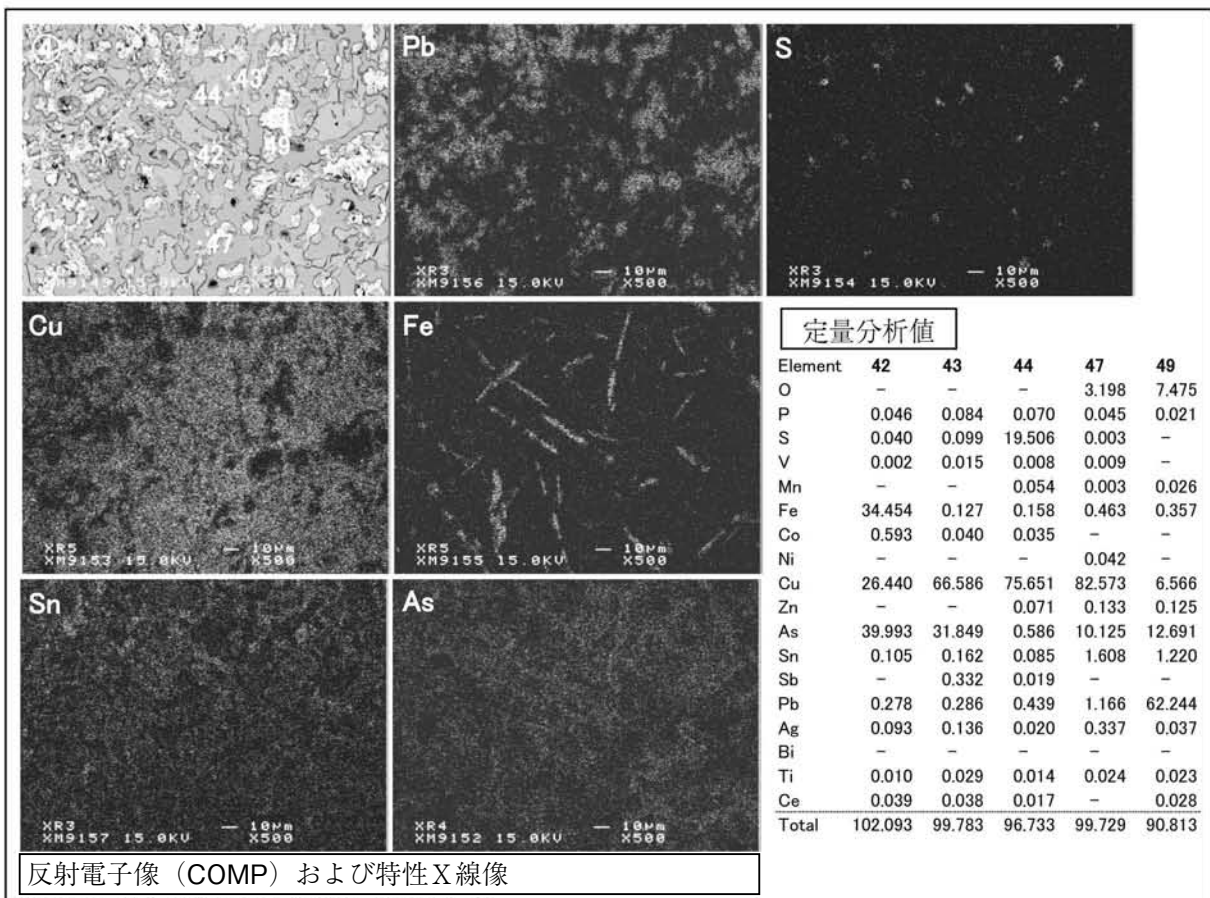
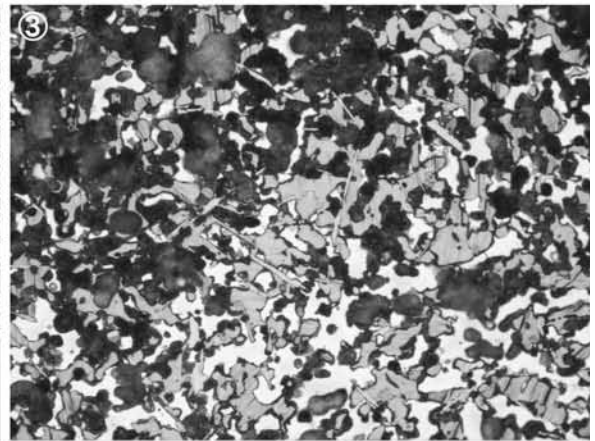
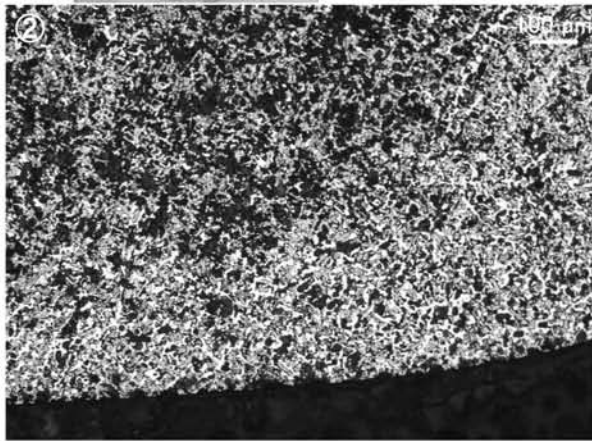
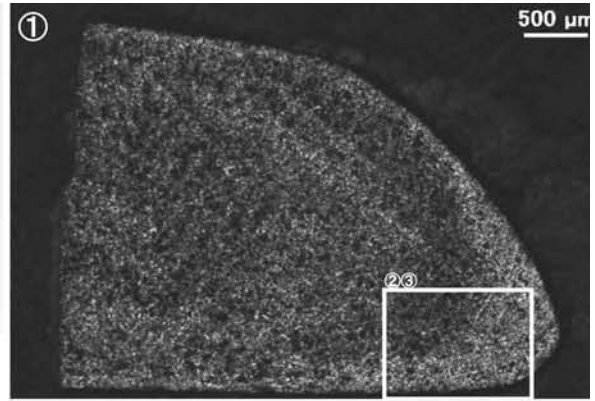


写真4 銅塊MNY-7の顕微鏡組織・EPMA調査結果

D-4 八花鏡

①マクロ組織、酢酸・硝酸・アセトン etch
 ②③金属組織拡大
 針状白色部：銅 (Cu) - 鉄 (Fe) - 砒素 (As) 相、不定形淡青灰色部：銅 (Cu) - 砒素 (As) 相、素地橙色部：砒素銅、暗灰色部：酸化鉛、粒状青灰色部：硫化銅



反射電子像 (COMP) および特性X線像

写真5 瑞雲双鸞八花鏡D-4 の顕微鏡組織・E PMA 調査結果

②マクロ組織：写真5-①に示す。試料採取面は光沢の強い銀灰色を呈する。①は断面を酢酸・硝酸・アセトン混合液で腐食した組織である。表層付近が淡黄色、中心部が暗灰色を呈する。これは融点のより低い鉛が中央に偏在するためと推定される。

③顕微鏡組織：写真5-②・③に示す。白色針状部は鉄(Fe)、砒素(As)、銅(Cu)を主成分とする相、不定形青灰色部は銅(Cu)、砒素(As)を主成分とする相、地の淡橙色部は銅の割合の高い相(Cu)と判断される。さらに微細な粒状・不定形の灰色部は硫化銅(Cu₂S)、暗灰色部は鉛(Pb)の銹化物と推定される(各相の組成に関しては、E P M A調査の項で詳述する)。

④E P M A調査：写真5-④に反射電子像(C O M P)を示す。白色針状部は特性X線像をみると鉄(Fe)、砒素(As)に反応がある。定量分析値は34.5%Fe-40.0%As-26.4%Cu(分析点42)であった。銅(Cu)、砒素(As)を主成分とする相である。また不定形青灰色部は銅(Cu)、砒素(As)に強い反応がある。定量分析値は66.6%Cu-31.8%As(分析点43)であった。こちらは銅(Cu)、砒素(As)を主成分とする相である。

微細な粒状青灰色部は、特性X線像では硫黄(S)に強い反応がある。定量分析値は75.7%Cu-19.5%S(分析点44)であった。白鍍(Cu₂S)に同定される。

素地の淡橙色部の定量分析値は82.6%Cu-10.1%As(分析点47)であった。砒素銅である。また反射顕微鏡下の明白色(反射顕微鏡下では暗灰色部)は、特性X線像をみると鉛(Pb)に強い反応がある。定量分析値は62.2%Pb-6.6%Cu-12.7%As-7.5%Oであった(分析領域49)。鉛の銹化物と推定される。銅などの他の元素は周囲の影響を受けた可能性が高いと考えられる。

⑤化学組成分析：表5に示す。分析用供試材を約0.02gに二分して、それぞれ測定を実施した。いずれの試料も酸分解により完全に溶解し、未溶解物は生じなかった。分析値は銅(Cu)と鉛(Pb)に若干ばらつきがみられる。これは鉛の偏在によるものと判断される。他の元素は近似している。

銅(Cu)は68.3%、64.8%であった。錫(Sn)は0.77%、0.80%と低値であるが、鉛(Pb)は11.56%、14.24%と高値傾向を示す。鉄(Fe)は1.18%、1.21%であった。砒素(As)は12.12%、12.80%と高値である。またビスマス(Bi)は0.20%、0.22%、銀(Ag)0.05%、0.04%であった。

当銅鏡は銅(Cu)、鉛(Pb)、砒素(As)が主成分であった。錫(Sn)を用いずに銀白色の色調を出すため、砒素(As)を多く含む銅素材を選択し、さらに鉛(Pb)を加えた可能性が考えられる。

c)化学分析に関するまとめ

美濃山廃寺から出土した鑄銅関連遺物と、女谷D4号横穴から出土した銅鏡を分析調査した結果、以下の点が明らかとなった。

【美濃山廃寺銅関連遺物】

①鍛冶炉区の7世紀後半～8世紀初頭と推定される土坑(S L 511)から出土した炉壁2点(M N Y-5・6)の内面表層にはともに高錫(Sn)青銅が溶着する。この特徴から青銅(Cu-Sn合金)製品を製作したことが明らかになった。

8世紀前半と推定される鑄造用溶解炉(S L 1)(M N Y-3・4)の溶着金属も、E P M Aを用いた定性・定量分析によって錫(Sn)が検出されている。しかし非常に局所的であり、むしろ銅

塊(MNY-1・2・7)とよく似た砒素銅と判断されている。こちらは意図的に錫が添加されたとは言い難い状態であった。

炉壁や坩堝などの溶着金属の組成はばらつきが大きいため、この結果に関しても慎重に解釈していく必要があるが、両遺構で製作された製品の違いや、時期差を反映した(8世紀中頃には錫の調達がより困難になった)可能性があり、着目される。

②SD7から出土した銅塊(MNY-7)は、鑄造用溶解炉(SL1)に伴って出土した銅塊(MNY-1・2)とよく似た組成の砒素銅であった。砒素含有率は2~3%とさほど高くなく、美濃山廃寺にはよく精製された銅素材(いわゆる「熟銅」)が鑄造原料として搬入されたと推定される。

なお、鍛冶炉区(SL511)出土炉壁(MNY-5・6)に溶着した高錫青銅は、砒素(As)の影響がほとんどみられない。このため出土銅塊(MNY-1・2・7)のような銅原料に錫を加えて鑄造したのではなく、青銅製品(またはその破片等)を改鑄していた可能性も高いと考えられる。

【女谷D4号横穴出土瑞雲双鷲八花鏡】

美濃山廃寺と近接する女谷D4号横穴から出土した銅鏡(D-4)は、現在は表面全体が緑青で覆われているが、試料断面は光沢の強い銀灰色であった。使用時にはこうした金属の色調となるよう、鑄込み時に調整されたと推察される。

また、化学分析の結果、主成分は銅(Cu)、鉛(Pb)、砒素(As)であることが判明した。錫(Sn)の含有率は1%以下で、意図的に添加された可能性は低い。錫(Sn)を加えずに銀白色の色調を出すために、砒素(As)を多く含む銅素材を選択し、さらに鉛(Pb)を加えて制作した可能性が考えられる。

上述したように美濃山廃寺出土銅塊(MNY-1・2・7)は、砒素(As)が2~3%程度と比較的少なく、鉄(Fe)も1%以下のよく精製された銅塊(熟銅)である。この八花鏡はそれよりも砒素(As)、鉄(Fe)の割合が高いため、美濃山廃寺内で鑄造された製品が副葬された可能性は低いと推察される。

4. 女谷鏡の歴史的意義について

片山昭悟や杉山洋らの研究から、鏡の製作流過程に3系列4段階の区分が可能である。3系列とは、すなわち第1系列(神門系列)、第2系列(大久保系列)、第3系列(霊安寺系列)である。第1系列は九州、とりわけ日向に工房を持つと考えられる系列であり、第3系列はすべて畿内で出土していることから、畿内のいずれかの工房で生産されたものと考えられてきた。4段階とは、本庄鏡が原型となり、AからDまでの踏み返し段階である。

本共同研究で、女谷鏡の比較検討の対象としたのは霊安寺鏡であるが、1号鏡は第3系列、2号鏡は第2系列に属しており、1つの寺院へさまざまな流通経路を経て搬入されたと考えられてきた。しかも二条鏡や坂田寺鏡は霊安寺1号鏡を踏み返したのと考えられてきた。しかし、先にも述べたように蛍光X線分析の結果からは、霊安寺1・2号鏡ともに低錫青銅を用いており、

かつ、1号鏡と同系列と見なされていた坂田寺鏡には高錫青銅が用いられていたことが判明した。これは、杉山氏の指摘の通り、瑞雲双鸞八花鏡の製作過程および流通過程が複雑であることを示している。

さらに女谷鏡および美濃山廃寺出土の炉壁と銅塊の分析では、

溶解炉S L 511：美濃山廃寺I期(7世紀末～8世紀初頭)→高錫含有率の鑄造原料

溶解炉S L 1 周辺溝S D 7：美濃山廃寺II-1期(8世紀前半)→高砒素含有率の鑄造原料

女谷D 4号横穴→高砒素含有率の鑄造原料に鉛を加える。鉄もやや高い含有率を示す

という結果が得られた。

これらの分析結果から、美濃山廃寺では時期ごとに鑄造原料の性質が異なることが判明した。美濃山廃寺I期とII-1期で生産されている青銅製品が異なるため、錫および砒素の割合が変化したとも考えられるが、現状では時期差とだけとらえておきたい。また、前項でも述べたように女谷・荒坂横穴群から出土した瑞雲双鸞八花鏡が美濃山廃寺で鑄造された可能性は低い。

このため、当初、女谷・荒坂横穴群は『正倉院文書』「隼人計帳」綴喜郡大住郷の項に隼人系氏族の居住を示す記述があることから、こうした氏族と関わりが深いと考えられてきた。また、美濃山廃寺についてもその可能性が考慮されてきたが、上記の瑞雲双鸞八花鏡の分析結果を見る限り、両者の関係を肯定的に見ることはむずかしい。

次に女谷鏡と靈安寺鏡との関連性についてまとめておきたい。錫の含有率に着目すると、女谷鏡は低錫含有率を示しており、一見、靈安寺1・2号鏡の原料に近い傾向を持つように見受けられる。しかし、女谷鏡は鉛や鉄の含有量が靈安寺鏡に比べると高く、低錫含有率であるというだけで、第3系列(靈安寺系列)に含まれると断定することは難しい。また、文様の検討などから第2系列(大久保系列)と考えられていた靈安寺2号鏡と、第3系列に含まれる1号鏡がともに低錫含有率を示すことから推察できるように、畿内の生産流通自体も一元化されたものでなかった可能性がある。靈安寺鏡と女谷鏡が示す違いはこうした流通の複雑さを反映したものである可能性がある。

女谷鏡は、美濃山廃寺の鑄造遺構とは関連性が見受けられないことが判明した。このことから、女谷・荒坂横穴群周辺で製作されたものではなく他所から持ち込まれたものであった可能性があり、この点もまた畿内における瑞雲双鸞八花鏡の製作流通過程の多様性を示していると考えられる。

謝辞

本共同研究の実施につきまして、次の方々にお世話になりました。記して感謝いたします。

岩戸晶子 杉本和江 杉本圭祐 吉澤悟

引用・参考文献

梅原末治 1950 「本邦出土に係る唐式鏡の資料」(『史迹と美術』第201号)

片山昭悟 1992 『兵庫県宍粟郡山崎町金谷一号墳出土の奈良時代の鏡 瑞雲双鸞八花鏡 全国の瑞雲

双鸞八花鏡集成』研究資料 No. 1、No. 2

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 2013 A 「美濃山廃寺第6次・美濃山廃寺下層遺跡第9次発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第154冊)

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 2013 B 「美濃山廃寺第7次・美濃山廃寺下層遺跡第10次発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第154冊)

後藤守一 1931 「本邦出土の唐式鏡」(『考古学雑誌』第21巻12号)

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 2004 『女谷・荒坂横穴群』(『京都府遺跡調査報告書』第34冊)

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 2011 「女谷・荒坂横穴群第11・12次発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第142冊)

杉山洋 1989 「唐式鏡の生産と流通」(『生産と流通の考古学』-横山浩一先生退官記念論文集I-) 339～358頁 1989

杉山洋 2003 『唐式鏡の研究』(鶴山堂)

高橋健自 1910 「本邦鏡鑑沿革考」(『考古界』第八篇第三号)

中野政樹 1972 「奈良時代における出土・伝世唐式鏡の基礎資料および同范鏡の分布とその鑄造技術」(『東京国立博物館紀要』第8号)

奈良国立博物館編 2012 「奈良時代の仏教美術と東アジアの文化交流(第二分冊)」(『科学研究費助成金[基盤研究(A)]研究成果報告書』)

奈良文化財研究所飛鳥資料館編 2002 『神門神社蔵鏡図録』-東アジア金属工芸史の研究1-飛鳥資料館研究図録第1冊

奈良文化財研究所飛鳥資料館編 2009 『同型鏡の研究 小型八花鏡 瑞雲双鸞八花鏡』-東アジア金属工芸史の研究11-飛鳥資料館研究図録第11冊

京都府南山城地域における古墳出現期の一様相

小池 寛

1. はじめに

京都府南山城地域には、いわゆる庄内式併行期に比定できる城陽市芝ヶ原古墳や同上大谷6号墳、木津川市加茂町砂原山古墳などの墳丘墓が確認されている。各々の墳丘墓は、発掘調査等により庄内式併行期の土器が認識され、破碎供献土器の出土状況などが正確に把握されている。

本稿で取り上げる城陽市富野荘上ノ芝にかつて所在した古墳である長池古墳は、昭和39(1964)年に発掘調査が実施され、古墳時代後期の前方後円形を呈する古墳であることが確認された。その後、著者が、昭和62(1987)年に発掘調査担当者であった故西谷眞治、白木原和美、故堤圭三郎、近江昌司諸氏の奨めによって出土遺物の再整理を実施した際、出土遺物の中に古式土師器を確認し、墳丘の築造時期が、古墳時代前期まで遡る可能性を認識するに至った。

本稿は、長池古墳の墳形についての今までの評価を検討するとともに、いわゆる庄内式併行期の遺物群を整理し、南山城地域における編年的な検討を加えることを目的としている。なお、本稿では、古墳時代後期の長池古墳と混乱しないように、庄内式併行期の墳墓については、長池墳丘墓と呼称することとする。

2. 城陽市長池古墳の既往の評価

長池古墳の調査は、昭和39(1964)年に宅地造成によって削平される直前の約1週間の緊急発掘調査として実施された。その調査において墳頂部で2基の埋葬施設とその東側で1基の埋葬施設が確認された。墳丘の調査は実施されなかったが、埋葬施設周辺の土層観察から大掛かりな墳丘の盛土は認められず、墳丘が築造された段階の旧地形を保っている可能性が指摘されている^(注1)。

一方、墳形については、後円部と前方部にはくびれ部は認められず、また、前方部が先細りであることから、前方後円墳として認定するには至らず、「前方後円形」を呈する墳丘であることが報告されている。しかし、同報告では、「前方後円形」を前提に全長50m、後円部直径32m、前方部先端幅を14mとして墳丘規模が示されている。地表調査の結果、段築、埴輪、葺石は確認されていない。

さて、本稿の主な目的である庄内式併行期の遺物群については、同報告書の第16図に土器、銅鏡及び管玉の出土地点が図示されており、小型銅鏡1面、碧玉製管玉1点、土師器の高杯片が散乱していたことが報告されている。この報告文から判断して、一括性の高い遺物群であることが認識できる。しかし、これらの遺物が、本来の



第1図 長池古墳位置図(1/25,000 宇治)

原位置を保っているか否かについては、判然としないとの報告がある。それ以後、この報告書を受けて、以下のように多様な解釈が提示されることとなる。

昭和44(1969)年に刊行された『城陽町史』では、埋葬施設の平面形と小型銅鏡や金環、管玉、棗玉、空玉、小玉の遺物写真を掲載し、「不整形な前方後円墳」として記載されている。先に述べた報告書では、前方後円墳としては断定しておらず、あくまで「前方後円形」であることを前提している。^(注2)この見解は、長池古墳の墳形を認定するうえで本質的な事実記載として重要である。

昭和47(1972)年に刊行された『南山城の前方後円墳』では、先に述べた報告書の事実報告を要約するとともに、前方後円墳論をさらに進展させている。まず、不整形な前方後円墳であり古墳時代後期の須恵器が出土していることから、築造時期が奈良県大和二ツ塚古墳と同時期であることから、「二ツ塚タイプ」の前方後円墳であることが論じられている。この時点では、出土遺物の中に古式土師器が含まれている認識はみられない。^(注3)昭和47年には、京都府教育委員会から『京都府遺跡地図』が刊行され、長池古墳の報告書に準拠しながら前方後円墳と明記されている。

昭和62(1987)年には、京都府内から出土した古鏡を網羅した『鏡と古墳』展が開催され、展示図録中の「鏡と古墳」の章において、陶邑編年TK43型式に比定できる須恵器壺と長池古墳出土の小型銅鏡を供伴遺物として紹介している。また、図録中、出土した小型銅鏡の型式名を櫛目文鏡と認定をしている。^(注4)

平成3(1991)年には、著者が「南山城地域の後期古墳の一様相」と題して、古墳時代後期の遺物の実測図などを提示した。出土した須恵器が陶邑編年MT15型式からTK43型式併行期であることを詳らかにするとともに、周辺に所在する芝山古墳群及び冑山古墳群の中での位置付けを行った。著者は、幸いにも発掘調査を担当された方々から直接、調査当時の所見をうかがうことができたこともあって、前方部とされた傾斜面は、古墳築造以降の地形改変により形成された可能性を認識するとともに、報告書では前方後円墳とは認定していないことを改めて示した。なお、出土遺物の実測時に第1埋葬施設の南方で出土した古式土師器や小型銅鏡、碧玉製管玉を実見し、長池古墳の墳丘が、庄内式併行期に築造されたことを初めて確認するとともに、調査を担当された方々や京都府立関係機関及び城陽市教育委員会の関係者にその旨を伝えた。^(注5)

平成4(1992)年には、全国の『前方後円墳集成』が刊行され、墳丘測量図を提示し、前方後円墳とする記述が見られる。その後、平成11(1999)年に刊行された『城陽市史第三巻』では、1995年の報告書を要約するとともに、先に述べた平成3(1991)年に提示した著者の見解を紹介している。しかし、庄内式併行期の遺物についての記述は見られず、したがって、墳丘築造時期についての記述は認められない。

平成4(1992)年に刊行された『城陽市史第一巻』では、長池古墳が南山城地域に点在する墳丘墓の1基として取り上げられている。しかし、墳形についての記述はなく、同書図45の「墳丘墓・集落分布図」には、×印により古墳の位置が示されているに過ぎない。また、「長池古墳の下層に、墳丘墓…」を想定する新見解が提示されている。一方、同書図62には、久津川古墳群と青谷地域の古墳の変遷が図示されており、編年表内の紀元250年前後の位置に□印で墳形と古墳の年代が

図示されているが、それに係る本文中の記述は見られない。なお、同書では長池古墳から出土した小型仿製鏡のX線写真を掲載し、5世紀後半以後の乳文鏡としての鏡式認定がなされている。^(注6)

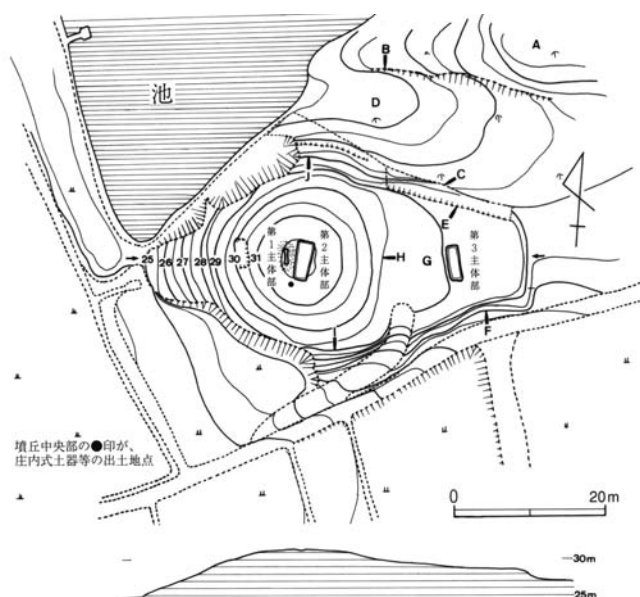
以上のように未だに墳形や築造時期等について不統一な記述が散見されるのが現状である。これは、執筆者毎の見解の相違と考えられるが、正確な情報を速やかに提示し得なかった著者にも責任の一端があることを明記しておきたい。

長池古墳は、1964年の調査当時においては「前方後円形」を呈する墳墓として報告されていたが、その後、ほとんど検討を加えることなく、前方後円墳として周知されるに至っている。しかし、墳丘そのものが既に消失し、現存しない状況下では、発掘調査を担当された方々の見解を中心とし、発掘調査報告内の記述と墳丘測量図に判断を委ねる意外の手段はない。そこで、再び、墳丘測量図を中心に墳形について検討を加えておきたい。

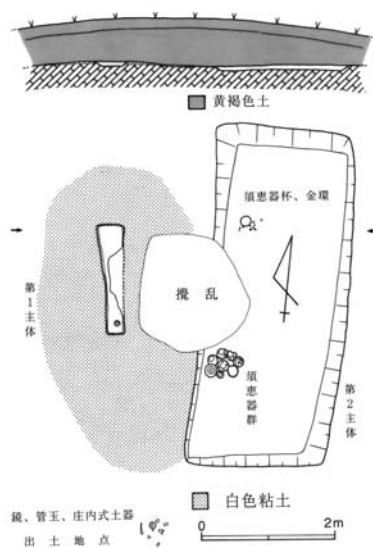
3. 長池古墳の墳形について

長池古墳の墳丘測量図は、1965年の発掘調査報告書に掲載された「第15図長池古墳地形図」以外には存在しておらず、先に述べた各文献には、当該測量図が転載されている。ここでは、あらためて前方部の有無と墳形について検討を加えてきたい。

まず、前方部の有無についてであるが、測量図の尾根Aは、高位段丘から南西に広がる低位段丘の先端部分にあたり、旧地形を留めている範囲である。この緩やかな斜面は、元来、第3主体部が位置する平坦部Gへと連なっていたと考えられる。しかし、長池古墳の北隣接地には、時期不詳の削り込みによる谷状の平坦面Dが広がっており、尾根A付近と平坦部Gは、不連続な地形を呈している。この削り込み部Dは、北側が崖B、南側が直線的な崖Cによって形成されており、特に、崖Cは、さらに深い削り込みEによって際立っている。つまり、平坦部Gは、削り込み部Dによって形成された地形であり、本来は、尾根A付近から派生する平坦な地形の一部として捉



第2図 長池墳丘墓墳丘測量図(注1より加筆転載)



第3図 庄内式土器等出土状況図(注1に加筆転載)

えることができる。1965年の報告にも記述があるが、埋葬施設付近では、大掛かりな墳丘の盛土は確認されておらず、墳丘の盛土を確保するための削り込みDが形成されたとは考えられない。

一方、古墳の南側には、里道がはしっており、F付近の地形が、あたかも前方部側面のくびれ部を呈しているかのように見える。しかし、当該地点は、東西里道と南北里道の交差点であり、その交差が鋭角をなしていることから、後世の里道敷設による地形の改変である可能性が高い。以上の観点から、前方部と解釈される平坦面Gは、元来、A付近から徐々に高度を下げながら広がりをもっていた自然地形の残存部と考えられる。その平坦面の先端部分には南北里道が敷設され、以後の地形改変に至ったと考えられる。

本稿では、以上の観点から第3主体が位置する平坦部Gは、人為的な盛土によって築造されたのではなく、また、前方部を意図した結果ではなく、自然地形である可能性を支持しておきたい。では、次に墳形について検討を加えておきたい。

第1・2主体が位置する墳形については、墳頂部が円形を呈していることから、円丘として認識されてきた。1965年報告においても「後円部径32m、墳頂と平地部との比高6.5m」との記述がある。墳丘については、先に述べたように後世の地形改変が著しく、測量図から正確に墳形を読み解くことは困難であると思われる。しかし、次にあげるいくつかの特徴から墳形についての言及が可能である。

先に述べた平坦面Gは、南北は後世の耕作などで原形を留めているとは考えられない。しかし、平坦部Gと墳丘裾部には、直線的な等高線Hが確認できる。また、墳丘南裾部Iは、西側を大きな崖によって削り取られ、東側は後世の墳丘部への登坂路が開削されている。しかし、僅かに残存する墳丘裾の地形図では、先に触れた等高線Hにほぼ直交するような直線的な等高線を読み取ることができる。一方、墳丘北側の墳丘裾部は、やはり、後世の地形改変を大きく受けているものの、等高線Hとは直交し、墳丘裾部Iとはほぼ平行する等高線を認めることができる。このことから墳丘が地山削り出しによって成形された築造当初の墳形は、方形であった可能性が指摘できる。なお、墳丘規模については、平行する南北の等高線と等高線Hから一辺約25mと推定される。墳頂部が、円形を呈している要因としては、古墳時代後期に埋葬施設が構築される際、墳丘の成形がなされた結果であり、墳丘全面における成形はなされず、墳頂部の整形の結果として認識する必要がある。その意味において、古墳時代後期の長池古墳は円墳として認識すべきであろう。

4. 出土遺物について

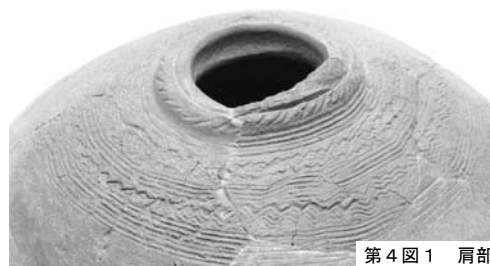
先に述べた地点から出土し図示した遺物は、土師器壺、高杯、古鏡、管玉の9点である。壺1は、胴部最大径が16.4cmを測り、頸部から基底部までの残存高は14.8cmである。肩部には3条の櫛描直線文と各々の直線文間に櫛描波状文を施している。肩部から胴部最大径部までは斜め方向のミガキが見られ、体部下半はヨコミガキで器面の調整をしている。肩部内面には、指頭圧痕が顕著に認められる。なお、体部と頸部の屈曲部外面には、突帯が貼り巡らされており、刻み目が確認できることなどから、二重口縁壺として認識することができる。

壺2は、胴体部には加飾をせず、一部にミガキがみられる。肩部内面は壺1と同じように指頭圧痕が顕著に認められる。直線的にのびる頸部を有すると思われるが、口縁部との接点はない。胎土や焼成などから同一個体と認識できる。その口縁部も胴体部と同じく無文であり、ミガキを観察することができる。先に見た壺1が他地域からの搬入土器であることに対して、壺2は、在地的な要素を多く含んでいたといえる。

高杯3は、非常に器壁が薄く、精良な胎土で焼成された口縁部径は21.2cm、器高14.4cm、復原底径16.9cmを測る高杯である。受部外面は丁寧なミガキを施しており、綾杉文上に竹管様の圧痕をもつ2個一対の円形浮文が貼付けられている。また、受け部内面にも丁寧なミガキが施されている。一方、脚部の屈曲突出部に刻み目を施し、その下方に山形文を接続したような波状文が施されている。

その他、高杯4は、円筒状の脚部であり、縦方向のミガキが見られる。器台5・6は、外面に縦方向のミガキが観察でき、3方の円形透かし孔が穿たれている。各々、基本的な形状は異なるが、複数個体の高杯の存在を把握できた意義は大きい。

古鏡7は、直径13cmを測る小型仿製鏡である。鏡背には繊維が付着していることから、副葬される段階

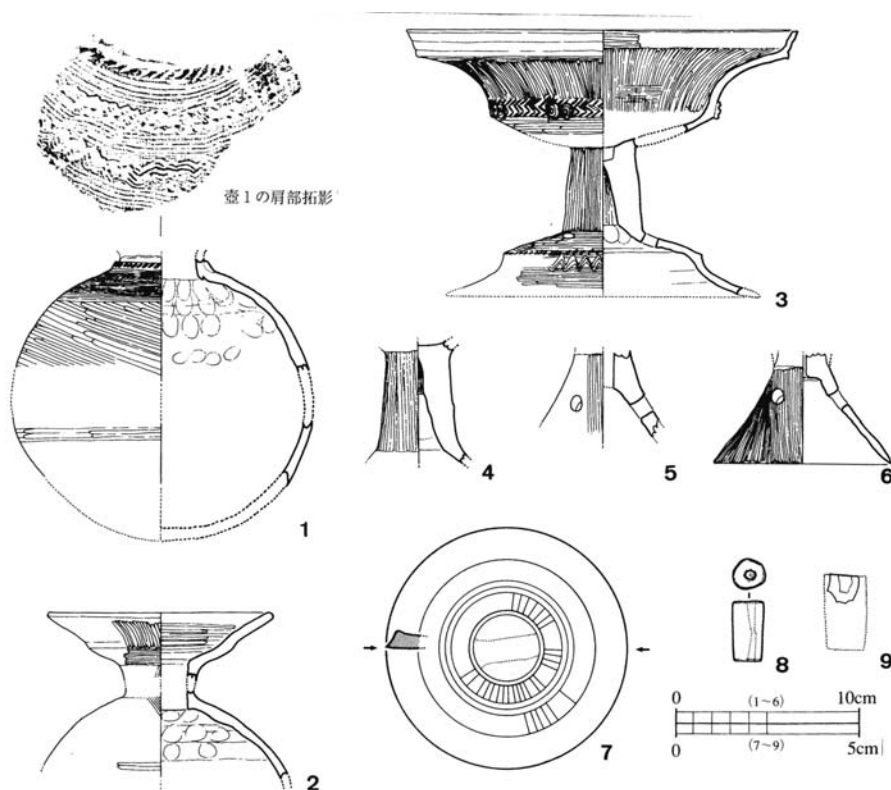


第4図1 肩部



第4図3 口縁部

写真 壺および高杯の文様



第4図 長池墳丘墓出土遺物実測図

で布に包まれていた可能性がある。鏡背には、圈線とともに櫛歯文帯が見られる。鏡式については、不明であるが、弥生時代末期～古墳時代初頭に見られる小型仿製鏡である。管玉8は、全長0.8cm、径0.4cmを測る碧玉製管玉である。管玉9は、同じ石材で作られた管玉の破片である。

これらの遺物は、発掘調査により同一地点からまとめて出土しており、一括性の高い遺物群である。壺1および高杯3から庄内併行期ないし古墳時代初期の遺物群であることが分かるが、その編年の位置付けについて、論じておきたい。

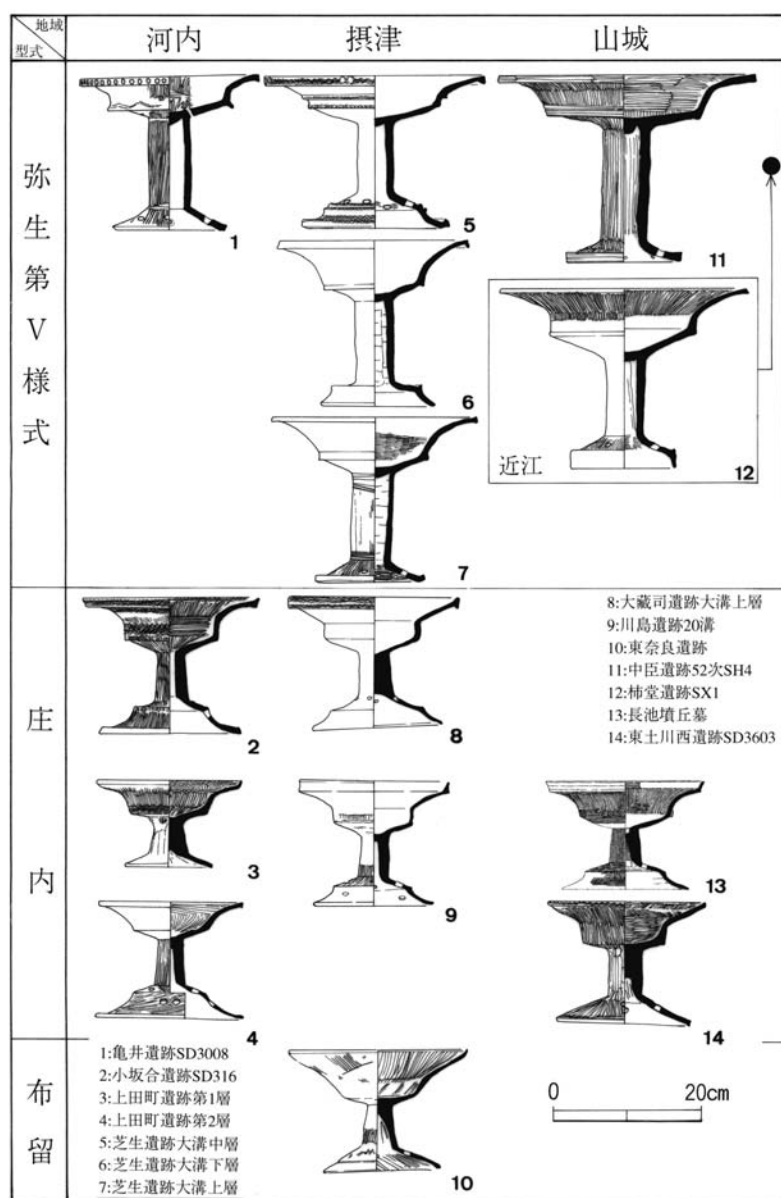
5. 出土土器の編年の位置付け

長池古墳から出土した土師器には、肩部に櫛描直線文と櫛描波状文を施すいわゆる二重口縁壺1が確認でき、典型的な庄内式土器の特徴を有している^(注7)。しかし、口縁部を欠いており、詳細な編年の位置付けができない状況である。一方、綾杉文上に竹管様の押圧を施す2個一対の円形浮

文を有する高杯3は南山城地域では初出資料であり、編年的な位置付けについて検討しておきたい。

加飾する高杯は、河内、摂津、山城などの各地域において、畿内の弥生第V様式から器形的な変遷が追える土器である。

大阪府高槻市の大蔵司遺跡大溝上層出土高杯8は、口縁部に竹管文や波状文で加飾する。しかし、脚部は三方の円形透かしを穿っているものの段はない。同様な特徴を有する高杯は、京都市中臣遺跡52次SH4から出土しており、柱状の脚柱部を有するなどの共通点が見られる。畿内弥生第V様式では、脚柱部の形状に違いが見られるが、加飾する点や丁寧なミガキによる器表面の調整を行なうなど、



第5図 有段口縁部を有する高杯・器台集成

当該型式の高杯が、埋葬あるいは宗教的な行為に伴う土器であることがわかる。

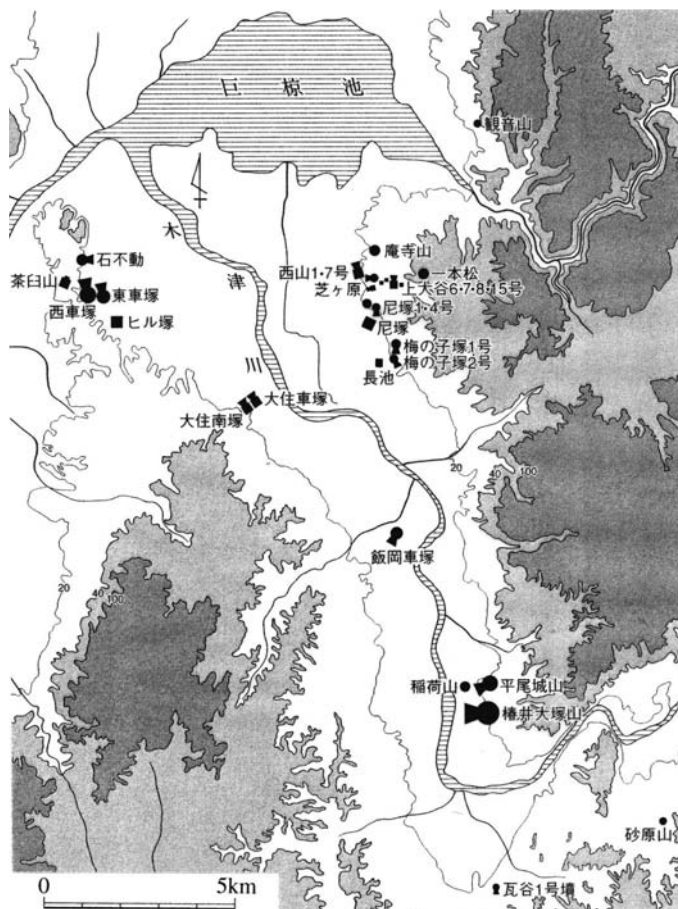
庄内式土器の範疇に編年できる同型式の高杯は、基本的な形態や加飾のあり方、調整技法は踏襲されているが、全体的に脚柱部の短脚化と口縁部の小型化が見受けられる。長池古墳出土の高杯は、初源期の庄内式土器と比較すれば、杯部と脚部の各屈曲部が緩やかになるなどの特徴があり、この特徴こそが庄内式土器の中段階の様相として認識できるのである。

7 長池古墳の評価をめぐって

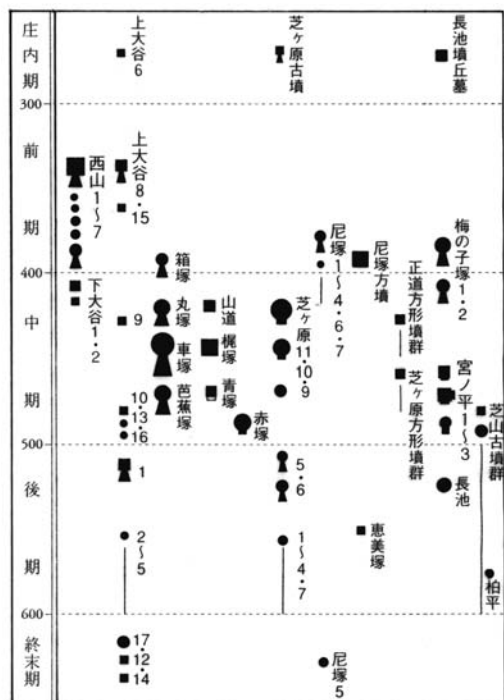
以上見てきたように、長池古墳は、庄内式併行期の中段階に築造された墳墓である可能性が指摘できる。また、墳丘については、従来、認識されてきた前方後円墳ではなく、方墳である可能性も視野に入れる必要がある。南山城における庄内式土器併行期の墳墓としては、芝ヶ原古墳や上大谷6号墳があるが、前期古墳群が築造される地域に、その先駆けとして墳丘墓が築造されることが把握されており、長池墳丘墓の北東丘陵には前期の前方後円墳である梅の子塚古墳群が存在している。各地域では、以上のように、方形墓を初源期の首長墓として築造していることから在地勢力の自立的発展がその背景にあると思われる。

長池古墳はその後、古墳時代後期に古墳として墳丘が改築されるが、墳頂部の形状から円墳を意図したことは認められる。しかし、先細りの前方後円墳を意識して築造されていない可能性が極めて強いことは、測量図の詳細な検討からも明らかである。埋葬施設から出土している須恵器は、陶邑編年MT15～TK43型式併行期に比定できる資料群であることは、すでに述べた。この時期に先細りの前方後円墳であると認定することは、古墳時代後期の久津川古墳群一帯における当該地域の優位性を示す根拠ともなりうる。しかし、当該地域には、長池古墳以外には際立った古墳は築造されておらず、当該地の優位性を示す根拠は見あたらない。

一方、長池古墳よりも南東方向1.5kmと2.3kmの丘陵には、各々、横穴式石室を埋葬施設とする陶邑編年TK43型式併行期に比定できる黒土古墳群や同TK209型式併行期に比定できる冑山古墳群が所在している。これら



第6図 京都府南山城地域の墳丘墓・前期古墳分布図
(注6に加筆一部改変)



第7図 京都府城陽市久津川古墳群編年表
(注6に加筆)

は、後期において横穴式石室を採用しない久津川古墳群とは離れた丘陵に所在する石室墳であることから、新興勢力の台頭が築造の背景にあると思われる。長池古墳は、久津川古墳群の中核からは離れているが、広義な意味において久津川古墳群の範疇に入れて解釈することができることから、黒土古墳群や冑山古墳群のように一定の広域性をもった古墳ではなく、通有にみられる規模の円墳として捉えることの方が蓋然性は高いといえる。長池古墳の発掘調査が実施されて50年が経過した。現在、久津川古墳群における数多くの古墳の年代や墳形については、発掘調査や地表調査により把握されているが、資料の再整理を行なうことによって、新たな所見を加えることも可能になるとと思われる。今後、発掘調査とともに資料の再整理を行うことは、地域史を見直す機会となるのではないだ

ろうか。

最後に本稿の執筆にあたり、故西谷眞治、白木原和美、故堤圭三郎、近江昌司、故高橋美久二各先生から整理作業の機会と指導をいただいた。思い起こせば、天理参考館から京都府立山城郷土資料館に保管管理が移行する段階での整理作業から長い時間が経過した。資料報告が遅延したことを深謝するとともに本稿が南山城地域の古墳時代を考えるうえの一資料になれば望外の喜びである。

(こいけ・ひろし = 当調査研究センター調査課課長補佐)

注1 白木原和美「6長池古墳発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報1965』)京都府教育委員会 1965

注2 城陽町役場『城陽町史』1969

注3 龍谷大学文学部考古学研究室『南山城の前方後円墳』1972

注4 京都府立山城郷土資料館、京都府立丹後郷土資料館、京都府教育庁指導部文化財保護課、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター『鏡と古墳』1987

注5 小池寛「南山城地域の後期古墳の一様相」(『京都府埋蔵文化財情報』第40号(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1991

注6 城陽市役所『城陽市史 第一巻』2002

注7 杉本厚典「二重口縁壺の編年と分布-河内地域の二重口縁壺の検討を中心に-」(『研究紀要第15号』公益財団法人大阪市博物館協会大阪文化財研究所)2013

※ 第5図は、表内に記載した遺跡報告書から再トレースを行なった。紙面の都合により、文献掲載は割愛した。

むかひやま
13. 向山遺跡第 2 次

所在地 京田辺市松井向山・上西浦

調査期間 平成25年10月2日～12月25日

調査面積 842㎡

はじめに 向山遺跡は田辺丘陵上に位置し、東西600m、南北90mの弥生時代中期から後期の遺物散布地として周知されている。今回は、新名神高速道路整備事業に伴い当該遺跡範囲内に切土施工が予定される部分の発掘調査を行った。なお、向山遺跡については、当調査研究センターが第1次として平成23年度に同事業に伴い発掘調査を実施しており、柱穴・土坑を検出し、遺物包含層からは弥生土器片が出土した。周辺の遺跡として、同じ丘陵上に松井横穴群、その北西の丘陵には女谷・荒坂横穴群と、大規模な横穴群が位置している(本誌35頁第1図参照)。

調査概要 調査区は平成23年度の調査区南端に接して、丘陵頂部平坦面に設定した。地表下0.5～0.6mは竹林造成のための盛土がされており、その直下に厚さ約0.2mの弥生土器片を含む遺物包含層がある。地表下約0.75mで遺構を検出した。また、調査区北半部と西側は大きな削平を受けており、遺構の検出はできなかった。

検出した遺構には、竪穴建物1棟(SH1)、土坑3基(SX2・3・8)、溝4条(SD16・37・38)のほか、多数の柱穴がある。竪穴建物SH1は調査区南東隅で検出した直径約8.8mの円形の竪穴建物である。一部が調査区外へと延びるため、全容は不明である。周壁溝と支柱穴を5基確認した。出土した遺物は少なかったが弥生時代後期の土器が出土した。土坑SX2は長軸2.5m、短軸1.0mの楕円形を呈しており、深さ0.2～0.3mの浅いすり鉢状である。また、埋土から弥生土器片が出土し、中央にはこぶし大よりもやや小さめの石を数個配していた。土坑SX3は長辺2.3m、短辺0.7mの長方形を呈しており、深さは0.2～0.3mである。埋土を掘削すると、こぶし大ほどの石が長方形に配置されていた。埋土から弥生土器片が出土した。土坑SX8は直径1.0mの楕円形を呈し、深さは0.2mである。弥生土器や石器が出土した。SH1とSX3の間で6基の柱穴からなる5.0mの東西方向の柵列を検出した。

まとめ 向山遺跡は遺物散布地として周知されていたが、今回の調査で弥生時代後期の竪穴建物や埋葬施設とみられる石を配置した土坑などが検出され、遺跡の様子が一部明らかとなった。調査区の北及び東側が自然地形の斜面となっていることからSH1は集落の北端に位置し、集落は南側へ展開するものと予想される。(山崎美輪)



写真 土坑SX3検出状況(東から)

びょうどういんきゅうけいだい びょうどういんていえん
 14. 平等院旧境内遺跡 史跡・名勝平等院庭園

所在地 京都府宇治市宇治蓮華・塔川

調査期間 平成26年2月3日～3月4日

調査面積 480㎡

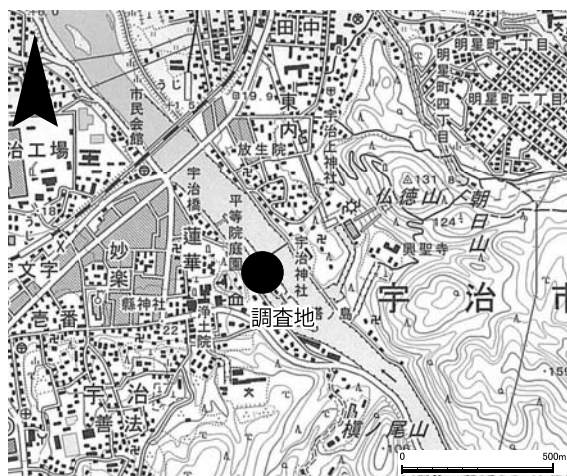
はじめに 史跡・名勝平等院庭園は、藤原頼通により永承7(1052)年に造営され、世界遺産に登録され広く知られている。創建当初は、かなり広い寺域を有していたと考えられており、かつての境内地とされたところが平等院旧境内遺跡として周知されている。

今回の調査は、宇治川塔の島地区周辺において、河床掘削、護岸工事などの改修事業が行われることになり、国土交通省淀川河川事務所の依頼を受けて実施した。この事業に伴う調査としては、平成24年度に橋橋下流部で1か所と喜撰橋上流部で2か所の調査を実施している。

調査地は、塔の島に架かる喜撰橋下流の左岸約130mが対象となった。対象地の下流側約70mは史跡・名勝平等院庭園の指定地内に一部が含まれている。

調査概要 調査は、対象地内に15か所のトレンチを設定して実施した。その結果、各トレンチとも現在の河床下から旧河道が検出されたが、時期については不明な点が多い。最も新しい河道としては、現状の護岸矢板を打ち込んだ護岸施設築造時期の河道が確認できるが、それより下層には3～4回の大小の河道が確認できた。対象地中央より下流側では、川床直下で塔の川左岸の基盤層を確認し、その上面で巨礫を検出した。上流側には巨礫は認められず、巨礫の下に潜り込む河川堆積の砂礫を確認した。塔の川中央付近に向けてトレンチを延長した結果、古い段階の河道跡及び護岸施設を確認した。いずれも断面観察のため、平面的な広がりの確認はできていない。

まとめ 基盤層上面で検出した巨礫については、地質学を専門とする増田理事に現地指導してもらったところ、礫の並び方から自然堆積であるという判断がなされた。一方、塔の川中央部付



調査地位置図
 (国土地理院 1/25,000 宇治)

近に認められた幅約4～6mにわたり巨礫が広がる部分については、巨礫が人工的に置かれ、両端の前面には杭が打ち込まれ固定されており、土手状の護岸施設が推定される。巨礫の間からは奈良～平安時代の布目瓦が出土しており、平等院に関連する施設である可能性がある。調査着手時の塔の川仕切り工事に伴う立会調査でも、同様な巨礫や割石が確認されており、塔の島方向に延びていくとも考えられる。このため、塔の島にかけての範囲をおさえるとともに、築造時期を明確にする必要がある。(増田孝彦)

まついおうけつぐん 15.松井横穴群第3次(1・2・4・11トレンチ)

所在地 京田辺市松井

調査期間 平成25年4月22日～平成26年2月27日

調査面積 1,800㎡

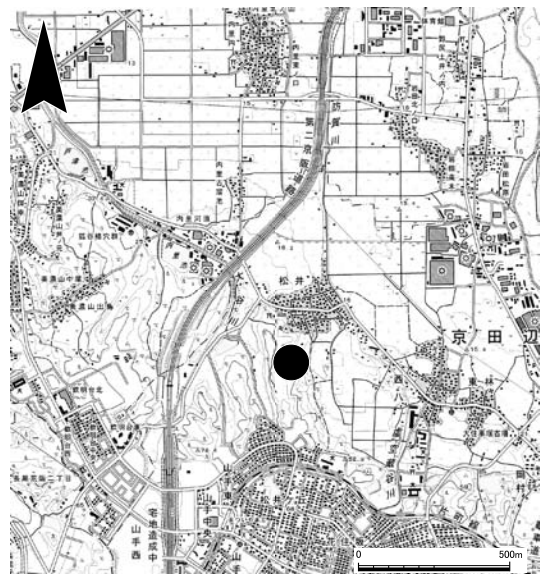
はじめに 松井横穴墓群では、新名神高速道路整備事業に先立ち、平成23年度から発掘調査を行っており、これまでの調査経過は本誌121・122号で略報している。ここでは平成25年度調査の後半期に行った第3次調査の1・2・4・11トレンチの状況について報告する。

調査概要

1トレンチ 谷の西斜面にある調査区で、以前略報した12トレンチとは尾根を挟んで背中あわせの位置にある。21基のうち南の8基を調査した。玄室の調査は次年度とし、墓道・羨道のみを調査した。羨道の天井が比較的良好に残存しており、空間への入口の高さが0.5m程度であったことがわかる例もある。土層断面の観察から、玄室の閉塞は土を積んで行っていることを確認した。墓道からは須恵器・土師器が出土しており、壺類などは意図的に脚を打ち欠いていた。墓前での葬送行為に関わるものと考えられる。羨道でも閉塞土に覆われて遺物が出土しており、閉塞に関わるものと考えられる。

2トレンチ 谷の東斜面にあたる調査区で、1トレンチとは谷を挟んで向かい合う。21基のうち南部の6基を調査した。横穴の平面的な分布には粗密があり、北側の3基が密集している。全長は、南側の2基(S X0201・0203)は一定の長さがあるのに比べ、北側のものは、北に向かうにつれてより短くなる傾向がある。玄室は、床面の標高が南から北に向かうにつれて低くなっている。玄室の形態についても、南側の2基は袖部をもつのに対し、北側に向かうにしたがって袖部が退化する様子が確認できる。これは、出土した遺物では捉えられないが、横穴墓の構築順に関わる時期差の可能性はある。S X0203の追葬面からは、飛鳥Ⅳ～平城Ⅱの範囲で捉えられる須恵器杯Bが出土している。

4トレンチ 1・2トレンチから尾根をはさんだ位置にある調査区で、5基を調査した。丘陵の東側にあり、木津川方面への眺望が非常に良い。墓道を東に向けるS X0401と0402は、墓道・玄室のみ調査を行った。それぞれの間隔が17mと広く配置されていて、長い墓道をもつ。床面はなだら



調査地位置図

(国土地理院 1/25,000 淀)



第2図 トレンチ配置・遺構分布図

かな斜面となっている。一方、横穴の開口方向を北に向ける S X 0403～0405は、4 mの間隔で並び、墓道は階段状を呈している。S X 0404では玄室中央から人骨が出土した。玄室主軸方向に沿って長管骨がまとめられ、奥壁側には頭蓋骨の一部も残存していた。S X 0405からは須恵器・土師器とともに鉄刀・耳環が出土している。

11トレンチ 横穴墓がつくられる丘陵に対し、北から入り込む谷の奥部に設定したトレンチである。トレンチの南端部では、谷の両斜面が数メートルの距離で向き合っており、ほぼ谷の最奥部にあたる場所である。遺構はなく、この谷における横穴墓の分布は1・2トレンチより南に広がらないことを確認した。谷底の堆積土からは弥生土器が出土している。上方の丘陵上で展開する向山遺跡から転落したものであろう。

まとめ 横穴墓の構築された時期は、T K 209～T K 217の範囲でとらえられる。追葬を確認した S X 0203の土器は7世紀末～8世紀前葉の時期のもので、この時期まで横穴墓が利用されていたことが判明した。横穴墓同志を比較すると、1・2・12トレンチよりも長大な横穴墓が眺望のよい4トレンチで造られている。また、2トレンチ内でも横穴墓の規模・形態が異なっており、時期や階層による違いの追及が課題となっている。近接する女谷・荒坂横穴群と比較すると、全長が短く、玄室も概して小規模である。加えて、墓道を階段状にするなどの特徴がある。

(加藤雅士)

山崎津跡第 18 次調査出土仮名文字資料

松尾史子

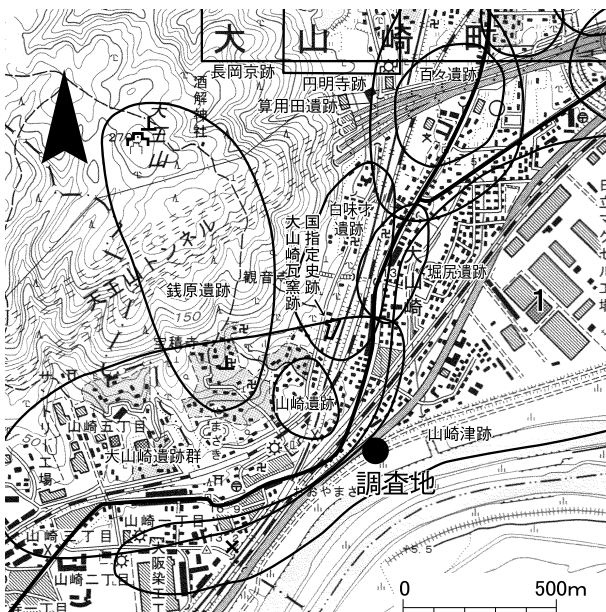
1. はじめに

山崎津跡は、大山崎町の南西に位置し、桂川・宇治川・木津川の3河川が合流して淀川となる地点から西へ約1kmの北岸に立地する。調査地周辺は、古代においては山陽道と南海道の分岐点であり、行基集団による布教拠点である「山崎院」や「山崎橋」の推定地ともなっている。また、地形的に陸上交通と舟運交通の結節点であったことから古くから交通の要衝であった。平安時代以降は紀貫之の『土佐日記』に見られるように津として賑わっていたようである。中世になると大山崎油座が活躍し、室町時代には幕府の庇護を背景に荏胡麻の購入特権を得ただけでなく京都と諸国との遠隔地取引にも従事するなど繁栄を極めた。

山崎津跡ではこれまで18次に及ぶ調査が実施されている。山崎津関連の明確な遺構は見つかっていないが、地形の落ち込み等が確認されている。本稿で紹介する文字資料は、第18次調査で出土したものである。

2. 木簡の出土状況

第18次調査は、緊急河川敷道路の建設に伴う調査で、平成23年4月から12月にかけて、河川の増水期を挟んで2回に分けて調査を実施した。調査の結果、前半期の調査区では近世以降の流路を、後半期の調査A区で12世紀後半から14世紀前半にかけての遺物包含層を確認した。この遺物包含層は地表下約3m、標高(O.P)7.0~7.5mに堆積した砂礫層や粘質土層で、完形の瓦器椀・土

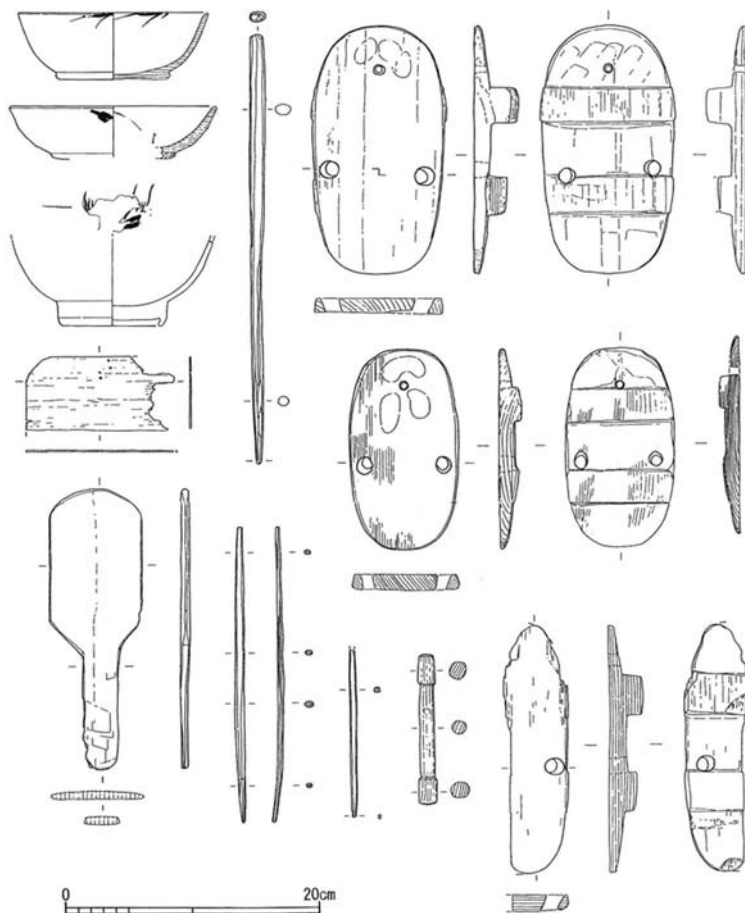


第1図 遺跡分布図(国土地理院 1/25,000 淀)

師器皿とともに多量の輸入陶磁器や木製品を含んでいた。文字資料はこの中世包含層から出土した。また、同層からはウマやイヌ・ネコなどの家畜種の獣骨や、アカニシやスッポンなどが出土しており、調査地一帯は都へ向かう街道沿いの居住空間と川の間で不用品の廃棄場所として土地利用されていたと考えられる。

3. 文字資料の积文

文字資料は、長さ29.0cm、幅2.5~2.8cm、厚さ0.3cmで、折敷ないし曲物の底板と考えられる。上辺と下辺は原型をとどめており、



第2図 山崎津跡出土木製品実測図 (S = 1/6)

左側は折損している。右側は原形をとどめている。時期は共に出土した土器や陶磁器の年代から中世前期と考えられる。

文字の書体は仮名で、

「ちくこくしのけのみ□□□の□

□□ はかとめていてかさねこん□□」

と読めるが、文意については不明である。文字の下にさらに墨痕が見えるようであるが、はっきりしない。

4. まとめ

中世前期の出土文字資料のうち仮名文字が書かれたものは非常に少なく、京都府内では墨書土器を含めても数例を数えるにすぎない。全国的には岩手県平泉の柳の御所跡や志羅山遺跡等で出土しているが絶対量は少なく、当時の仮名文字使用状況を知る上で貴重な資料といえる。

(まつお・ふみこ=当調査研究センター調査課企画調整係主任)

〈参考文献〉

小池寛・引原茂治他「山崎津跡第17・18次発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第155冊(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2013

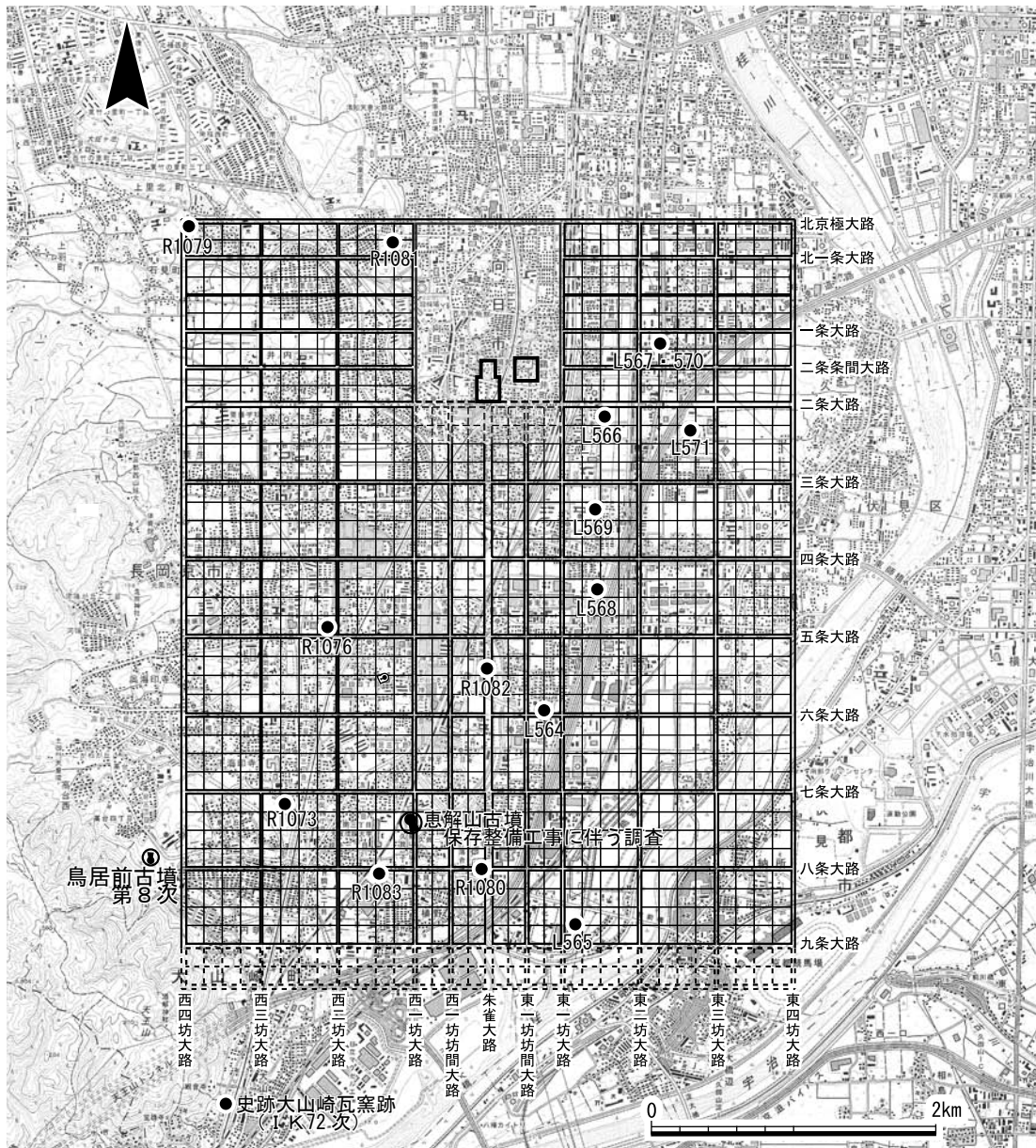


写真 文字資料 (S = 1/3) 奈良文化財研究書 中村一郎氏撮影

長岡京跡調査だより・120

長岡京跡発掘調査の情報交換および資料の共有化を図り、長岡京跡の統一的な研究に寄与することを目的として、毎月1回、長岡京域で発掘調査に携わる機関が集まり長岡京連絡協議会を実施している。平成26年2月から5月の例会では、右京域7件、左京域9件、京域外2件の合計18件の調査報告があった。その中で、主要な事例について報告する。

右京域 伊賀寺遺跡・友岡遺跡と重なる第1073次調査(長岡京市友岡)では、小泉川左岸段丘上に形成された縄文および飛鳥時代の居住域の広がりを追認する成果が得られた。縄文時代中期末

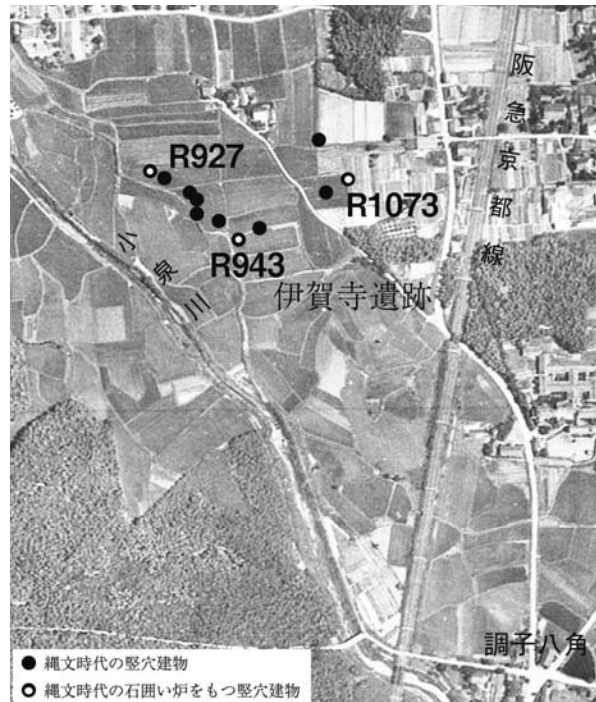


調査地位置図 (1/50,000)

(向日市文化財事務所・(公財)向日市埋蔵文化財センター作成の長岡京条坊復原図を基に作図)

調査地はPが宮域、Rが右京域、Lが左京域を示し、数字は次数を示す。

(北白川C式期)の竪穴建物3基を新たに検出し、うち1基には石囲炉が造られていた。飛鳥時代では建物主軸を自然地形に揃える、竈付きの竪穴建物と掘立柱建物からなる建物群が検出され、近接する鞆岡廃寺との関連が推定できる。長岡京期の掘立柱建物も確認され、当地区の土地利用の実態が明らかとなった。第1076次調査(長岡京市長岡)では、弥生時代の溝、古墳時代の総柱建物、奈良時代の掘立柱建物(総柱と側柱)、長岡京期の溝などが検出された。第1079次(京都市西京区大原野)では新たに埋没古墳が検出された。段築により造成された墳丘には外部施設として葺石と埴輪列が敷設され、埴輪類(円筒・家・靱など)から5世紀前半の古墳であることが判明した。第1082次(長岡京市神足)では近世勝龍寺城「若宮」想定位置で、礎盤をもつ南北方向の柱列が検出された。



第2図 伊賀寺遺跡縄文時代竪穴建物分布図
(国土交通省国土地理院の1948年撮影航空写真に合成)

左京域 第564次調査(長岡京市神足)では長岡京六条大路の路面を確認し、多数の土錘が投棄された土坑などを検出した。恵解山古墳(長岡京市勝竜寺・久貝)の整備に伴う調査では、前方部西側の第2テラス面の埴輪列が確認された。第565次調査(京都市伏見区淀)では、沼沢地における激しい水流を起源とする溝状の落ち込みと、その下層で植物遺体を含む粘質土、さらに標高3.5mで河川堆積層を確認し、当地の自然環境を知る上で有意な資料が得られた。第567・570次調査(向日市鶏冠井)では、幅0.5~0.6mを測る東三坊西小路の東側溝が検出され、路面幅が9~9.5mであることが判明した。また、下層で縄文時代晩期の土器がまとまって出土する包含層を当地域では初めて確認した。鴨田遺跡と重複する第568次調査(向日市上植野町)では、長岡京期の井戸(縦板横棧組)と宅地内の排水・離水に関わる溝(暗渠)が検出された。第569次調査(向日市上植野町)では、しがらみを伴う東西方向の溝を検出し、埋土から「丸」墨書を含む奈良時代の土器類が出土した。第571次調査(京都市伏見区西出町)では東三坊坊間東小路の西側溝を検出し、内部から人形と和同開珎が出土した。

京域外 鳥居前古墳第8次調査(大山崎町字円明寺)では後円部の南東部の調査が実施され、部分的に4段に築成された下段墳丘は地山を成形加工した上で葺石が施工されていることが判明した。史跡大山崎瓦窯跡(大山崎町字大山崎)では、瓦窯に先行する時期の大型掘形をもつ柱列(5間分)を確認し、「山崎院」の北側に展開する奈良時代の集落の一端が明らかになった。

(伊賀高弘)

普及啓発事業（平成26年4月～7月）

当調査研究センターでは、埋蔵文化財発掘調査の成果を広く府民の皆様へ報告し、地域の歴史を理解していただくため、埋蔵文化財セミナー・小さな展覧会・出前授業(体験学習)等の普及啓発活動を行っています。

埋蔵文化財セミナー

第127回埋蔵文化財セミナーを、6月7日(土)に丹後郷土資料館で実施しました。

今回のセミナーでは、『いにしへの丹後地域のムラと墓－弥生・古墳時代の最新成果から－』



第127回埋蔵文化財セミナー会場

をテーマとして、「1. 石田谷遺跡・由里古墳群の調査成果について」、「2. 丹後の弥生時代から古墳時代の集落動向について」、「3. 丹後地域における古墳時代の石棺文化」の3本の発表を行いました。第1題では、弥生時代後期の竪穴建物がみつかった与謝郡与謝野町に所在する石田谷遺跡および古墳時代中期の石棺を埋葬施設とする由里古墳群の発掘調査についてわかりやすく紹介しました。第2題では、この地域の弥生時代を通史的に捉え、集落動向の画期を後期後半に求め、谷部に立地する石田谷集落の特質を明らかにされました。そして、第3題では、古墳時代の石棺を概説し、丹後における箱式石棺の事例を通じてその特質に迫り、石材加工痕跡や棺内礫床などについて詳細な検討を加え、由里1号墳の石棺の意味するところを考察されました。



第127回埋蔵文化財セミナー発表風景

なお、当調査研究センターの石野理事による貴重な講評をいただきました。

当日は天候にも恵まれ、96名の参加者を得て盛況のうちに無事終了することができました。



第127回埋蔵文化財セミナー企画展示

現地説明会

5月11日(日)に、城陽市下水主遺跡の弥生時代から飛鳥時代にかけての調査について、現地

説明会が行われました。出土遺物(土器や木器など)から古墳時代前期初頭に浚渫された護岸設備をもつ幅約10mの東西溝、及び飛鳥時代の木組みの井戸や掘立柱建物・土坑などが見つかり、当該期の集落が存在したこともわかりました。府内最大級の久津川古墳群を擁する久世郡の平野部における集落の発見ということもあり、258名の大勢の見学者がありました。

昨年度の調査で、平安時代から中世にかけての集落が見つかった舞津市大川遺跡では、その下層で弥生時代から飛鳥時代の遺構が検出され、その成果について、5月31日(土)に現地説明会が実施されました。由良川自然堤防上に形成された弥生時代(中期・後期)と古墳時代(後期)の竪穴建物、及び飛鳥時代の掘立柱建物が所狭しと見つかり、98名の参加者は興味深く当時の様子を聞き入っていました。

体験学習

6月21日(土)と7月12日(土)に府立鴨沂高等学校を会場に、同校が主催の土曜授業「京都文化入門」の一環として、1年生の生徒を対象に体験授業を実施しました。現在は使われていない旧学舎を前に、発掘・測量・土器の洗浄などの体験を通して、校地の歴史を振り返るとともに、埋蔵文化財の調査の流れを学んでいただきました。

(伊賀高弘)



下水主遺跡現地説明会

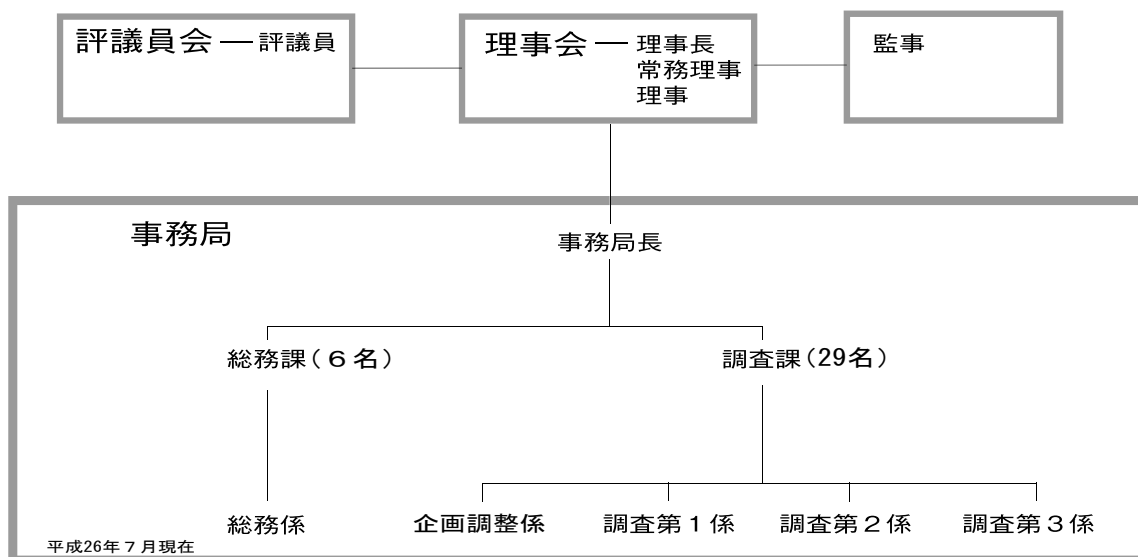


大川遺跡現地説明会



鴨沂高校体験学習

平成 26 年度のセンターの組織



センターの動向

(平成 26 年 3 月～6 月)

月 日	事 項
3 4	平等院旧境内遺跡調査終了、椋ノ木遺跡調査終了
5	大川遺跡調査終了
8	第126回埋蔵文化財セミナー(於：長岡京市産業文化会館、107名)
18	長岡京跡・下津城跡調査終了
20	第10回理事会(於：ルビノ京都堀川)
4 10	下水主遺跡調査開始
14	松井横穴群調査開始
25	木津川河床遺跡調査開始
5 8	下水主遺跡報道発表
11	下水主遺跡現地説明会(258名)
19	出雲遺跡調査開始
21	平安京跡・東本願寺前古墓群調査開始
31	大川遺跡現地説明会(98名)
6 7	第127回埋蔵文化財セミナー(於：丹後郷土資料館、96名)
9	第11回理事会(於：ルビノ京都堀川)、寺町旧域・法成寺跡調査開始
21	鴨沂高校体験発掘
24	第4回評議員会
25	第12回理事会

編集後記

平成 26 年度最初の京都府埋蔵文化財情報第 124 号が完成いたしましたので、お届けします。

本号では、平成 25 年度の京都府内における埋蔵文化財の動向を振り返るとともに、当調査研究センター職員による共同研究事業のまとめとして古代銅製品の理化学分析から導かれた比較検討、および、城陽市長池古墳を紹介する論考、さらに、山崎津跡で出土した木簡史料についての解題を掲載いたしました。

ご一読いただければ幸いです。

(編集担当 伊賀)

京都府埋蔵文化財情報 第124号

平成 26 年 9 月 30 日

発行 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒 617-0002 向日市寺戸町南垣内 40 番の 3

Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189

<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒 604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル

Tel (075)256-0961(代) Fax(075)231-7141



KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER